

---

# 死んじゃうんだって

タンポポ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

死んじやうんだって

### 【Nコード】

N1076D

### 【作者名】

タンポポ

### 【あらすじ】

『人生なんてつまんねえよ』それが俺に定着された考えだった。そんな俺は自殺を決意する。そこに現れた死神によって、俺の人生は急展開を迎える事となった。死神の能力『占い』によって、一週間、俺の運気は急上昇する！……プロローグとエピローグを含み、全9話で完結予定です

ブローグ・お前が…死神？

ーさようなら。

誰に言う訳でもなく、俺は一人心中でそう呟いた。

俺が住んでいるこの町の中でも、間違いなく五本指に入る高さのビルの屋上で風を浴びている。

こっちの心境なんかお構いなしに吹く心地良い風が、無造作にセツトされた長い黒髪を靡かせた。

そこで俺は目を閉じてみる。

今までの18年間の出来事が、嘘のようにポツカリと忘れ去ってしまっている。

思い出そうにも思い出せない。

俺は今まで何をしてきたんだ…？

しいて言うなら、つまらなかった。

「おっと、未練がましくなっちまうな。それじゃ、そろそろ逝こうとするかね」

俺は向かう。フェンスの向こう側へ。

もちろんその先の地面など、遥か下の方である。

間違いなく即死できる高さだ。

下を見ると、人間が豆粒のように小さく見えた。  
不思議と恐怖は感じられなかった。

「さて…」

俺は一度大きく息を吸い、そして吐いた。

準備完了。いつでも逝ける。

「――死んじゃうの？」

……誰だよ、これからって時に。

背後から聞こえた声の主の方を振り向くと、見た目は中学生くらい

の幼い顔立ちで、何やら妙な格好をした女の子がいた。

いつから？ いや、そもそもどうやってこの場所へ来た？

このビルは俺の叔父が経営している所で、俺は高校に通いながら清掃員の仕事をしている。

主にこういった屋上やら地下など、なるべく人目のつかない場所を担当しているわけだ。

よって、屋上の鍵のスペアは俺が持っている。邪魔が入らないようにと鍵も掛けたはずだ。

「死んじゃうの？」

繰り返し同じ事を聞いてきた。

面倒だ。素直に、そうだよと言って引き下がってくれるだろうか？

「うん、今から死ぬ所だよ。さ、ほら、邪魔だから出てって」

「本当に死んじゃうんだね？」

しつこいなあ。何をそんなに確認する必要があるんだよ。

「はじめまして。私、俗に言う死神なんぞをやっている者ですが、

以後お見知りおきを」

スカートの裾を掴み足をクロスさせ、上品に挨拶をしてきた。

ちよつと待てや。

今コイツ死神って言ったよな？

頭おかしいんじゃないのか？

「あなたをパートナーとさせていただきますね」

話を勝手に進める自称死神。こっちは展開が掴めん。

「待て待て、アンター体何者だよ？」

「死神です。さっきそう言いましたよね？」

「信じられるかっての、死神なんか」

俺は人間の架空上でしか存在しない生物は認めない主義だ。

いや、仮にそうじゃなくても、いきなり目の前に現れた女の子が死神ですなんて誰が信じられるとも言うのだろうか。

「えーと…あ、そうだ。影！ 私の影を見てみて下さい」

影？ 俺は女の子の足元を見てみた。

ー影がない。

今は昼間だから太陽も高く、現に俺には影ができている。

だがコイツはと言うと、影などまるでないではないか。

トリック？

手の込んだいたずら？

何だっというんだ、一体。

「あ、後…空飛べます。いきますよ、ほら。ね？　これで信じましたか？」

未だに頭を整理中の俺を尻目に、そいつはフワフワと宙に浮いてみせた。

「はあ！？　ちょ……ええええ！？」

まぬけな声が屋上全体に響く。無理もないだろ、目の前で女の子が宙に浮いたんだ。

今の時代でそんな芸当ができる奴は名の知れたマジシャンだとか、その類だけだ。

おそらく、今の俺の顔は、テレビで見るリアクションのでかい客並だろう。

「ほら、鎌だつて出せますし」

さらに女の子は右手から鎌を召喚させた。

何もなかった空間が僅かに歪み、黒いホールが出てきたと思えば瞬きの一瞬の間にホールは消え、それが鎌となった。

鎌を天高く振りかざし、一步一步近付いてくる。

「ま、待て。死神だと言う事は信じよう。だから、その鎌をしまつてくれ」

「あれー？ 変ですねー。死にたいんじゃないのですかー？」

間違いない。俺を殺す気だ。じゃなかったら目がこんなにも冷たくない。

俺の体からも危険信号が赤ランプなのが認識できる。

確かに死にたかった。だが、まさかこんな終わり方だとは思わなかっただけに、少し慌てて生への執着心を見せてしまった。

でも、これで良かったのかもしれない。何せ普通じゃない死に方ができるんだ。



「いや、何でもない。さ、やってくれ」

俺は意を決すると、目を閉じ手を広げた。  
無防備な格好からは いつどこからでもどうぞ という意味で捕らえてもらえるだろう。

「はあゝい、じゃあいきますよー!」

女の子の足音が、早く、近くなってくるのが分かる。  
勢いをつけるために走ってきたのだろう。

耳元から風を切り、鎌を振られる。

ーースパッー

痛みはない。ありがたい事に、苦しまず一思いにやってくれたのだろうか？

待て、何で意識があるんだ？

俺は目を開ける。

目に写ったのは、先ほどと何も変わらない風景で、女の子が笑っている。

「あ、あれ？ 俺を殺したんじゃないの？」

「ええ、殺しましたよ」

「じゃあ何で俺はここにいるわけ？」

「あなたが死ぬのは一週間後だからですー」

晴れやかな笑顔を見せられて、そんな事を言われても理解に苦しむだけののだが…。

「ごめん、意味が分からないから説明してもらえるかな？」

「はい。まず、私は死神です」

「それは分かった」

「そして、この鎌であなたを斬りました」

「うん。目を閉じてたから見えなかったけど、確かに体の中を冷たい何かが通ったのは分かった。問題はその先だ」

「はい、この鎌は メモリー・ソウル と言います。これで斬られた人は、記憶に残っている思い出の数が少ない程、 生きる 期間が多く与えられます。」

あなたの場合、なーんにも思い出がないような生き方をされていたので、期間は上限の七日間となります」

「おい、ちょっと待ってくれよ。俺は死にたいって言っただろ？

一刻も早く…できるなら今すぐにでもこの世から消えてなくなりたいんだ。そんな俺に一週間の命だ？ 辞めてくれよ！ さすが死神様だな、やっぱり人間の敵だ！！」

俺は頭に血が上り、やけになっていたのだろう。  
女の子に背を向け、勢い良く走り出した。

フェンスをよじ登り、そのままダイブした。

落ちる落ちる落ちる。

重力に従い、俺の体は急降下していく。

不思議と周りの景色がゆっくりに見えた。  
地面はすぐそこだ。今度こそ、俺は死ぬ…！

――スタッ

おそらく、体操競技界でも採点が厳しいと言われる頑固者でも、この俺の着地を見たら迷わず満点と叫ぶであろう。

あの高さから落下した俺はいとも簡単に足から地面に着地し、骨を折るでもなく、今にも走り出せそうな程ピンピンしていた。

周りの連中は、それはそれは驚いた顔で俺を見ている。

突如空から降ってきた人間だ。今の俺こそ死神だとか騒がれてもおかしukはない。

……えーと、どうしよう。ひとまず言い訳を考えなければ。

こんな状況でどんな言い訳すりゃ良いんだよ！  
そこまで俺はアドリブが効く人間じゃねえよ！

「ね……猫のモノマネ！」

苦しい！ さすがに無理があるだろ、俺！

確かに猫は見事な着地をするけど、回りくど過ぎる！

俺の前世は猫だったんです。だから高い所もへっちゃらだにゃー

の方が良かったか？

いや、そういう問題じゃねえだろ。

「なあんだ、猫のモノマネか」

納得かよオイ！！

周りの連中は何事もなかったかのように流してくれました。

「いきなり飛び降りないでよー！」

俺がいたビルの屋上からフワリと降りてきた死神。

「なあ、なんで？　なんで俺は死なないの？」

「話は最後まで聞いてほしいです。あなたが死ぬのは一週間後。それまではどうやっても死ねないんですよ」

「だから何でだって言ってるんだ……」

つついカッとなって怒鳴ってしまったが、周りの目が余りにも痛い。

そりゃそうだろう。高校生には見えないとまで言われる程の外見の俺が、こんな街中で中学生の女の子の胸倉を掴んで大声を上げているんだ。

誤解されては困る。ひとまずここは退くでしょう。

「大丈夫ですよ。私の姿はあなた以外の人間からは見えませんから」  
なおさら問題じゃねえか畜生。

一人で大声を上げているなんて通報されても文句は言えない。

しかも、あたかも何かがあるように手を動かしているんだ。

人には見えないものが見える。

薬中だと思われるね、間違いなく。

「…………よし、パントマイムの練習終わり！」

誰なんだ俺は。

あ、しまった！

パントマイムは喋らねえー！！

って、だからそうゆう問題じゃねえっての。

「…………とにかく、俺の家に来い。話はそれからだ」

「顔真つ赤ですねー。何か企んでいるんですかー？」

死神は照れ臭そうに胸を手で隠した。

馬鹿な事言っな。

確かにコイツは目も大きくクリクリしていて可愛いが、死神と認識した以上は圏外である。

と、言うより俺は女に興味がない。

金、女、友、名誉、その人間の欲が俺にはない。欲しいと思わないのだ。

別に感情がないわけではない。

驚く事も泣く事も怒る事も、笑う事だってもちろんある。

ただ、それらの感情は俺の　だから何？　の言葉の前に屈してしま

うのだ。

そう考えると、この死神は今までにない感情が湧いてくるな。

いつの間にかコイツのペースに巻き込まれてしまうような…そんな感じがする。

「じゃあ行きましょうか。ここから遠いですか？」

「いや、ここだよ」

俺の指差した所は、今いる所の正面のマンション。  
飛び降りたビルのお隣りさんだ。

「こんなに自宅の近くで死のうとしてたんですか。呆れますね」

ふん、親なんて俺をどうでも良いと思っているんだ。俺だって親なんて…と、対抗したくもなるさ。

マンションに入り、エレベーターを使い最上階まで上る。

「ここだ。まあ入ってくれ」

俺は死神を中に入れると、適当に座らせ、コーヒーとお茶菓子を出してやった。

「広くて綺麗ですねー。でも、何もありませんー」

そう、俺の部屋には生活に最低限必要な物しか置いていないため、テレビゲームや漫画やCDプレーヤーなどは一切ない。

「家族はどうしてるんです？」

「住んでるよ、このマンションの隣の部屋に」

「ほえ？」

俺の返答が意外だったのか、コーヒーを啜る手を止めた。

「父は隣の部屋。母はそのまた隣。みんなバラバラだよ。生活費は毎月充分過ぎる程の額が郵便受けに入ってる」

「ご両親は何をされてる方です？」

「……………どうでもいいだろ、そんな事は。それより、話の続きだ」

「そうでした」

死神は改まって座り直した。

「あなたは人間として生きていませんね。そんな人が死んだら……どうなると思います？」

死んだ後の世界なんて知った事じゃない。  
天国や地獄があるとも到底思えないしな。



「分からん」

「天国も地獄もありません。死んだら、また何かに生まれ変わります」

「ほう…」

死後の世界の実態を知る者は俺が初めてだろう。  
少しだけ興味が湧いてきやがった。

「肉体は朽ち果てようと、魂は消えません。現在、地球上には約六十億の魂が存在しています。ですが、今は少子高齢化社会ですよ。それは何故だか分かりますか？」

「うーん…不景気だから子供を作る余裕がなくなって、独身の人が増えてるからだろ？」

「実は違うのです。先ほど生まれ変わると言いましたが、最近はおなたみたいに自殺する人が多く、生まれ変わろうとしない魂が急増しました」

うむ…言われてみれば、小学生すら自殺をするこの時代だ。

「もちろん、生まれ変われば記憶はなくなります。ですが、元の魂は同じです。魂の周りに肉体を作り、また地上へ送るわけなので、性格は似てしまう事もあります。なので、犯罪者は一生いなくならないと思いますよ？」

なんか人間リサイクルみたいな感じなんだな。

どうやら、俺はすっかり死神の話に食いついてしまった事が自分で

も分かる。

まだ誰も知らない死後の世界の話だぞ？ さすがに興味はあるさ。

友人にこんな話をされても、今までの俺なら、精子がどうのこうのの御託を並べていただろう。

実際、子供ができる理由はそうなのだが、今はこのファンタジーな世界の虜となってしまった。

「天国と地獄がないと言ったな？      じゃあ 肉体が死んだ魂は 何処へ行くんだ？」

「はい。それこそが、私達異世界の者が住む、黄泉の国です。ですが困った事に、生まれ変わろうとしない魂が溢れかえってしまっ困っているのです…」

そこで私のように地上に送られた者が、自殺者の前に現れ、生きてるって楽しいんだよって事を教えようと言っわけです！！」

まるでセールスマンが商品の特徴を強く述べるかのように熱く語ってきた。

あのまま俺が死んでいたら…生まれ変わるかと聞かれても絶対ヤダというだろうな。

またそんな魂が一つ増えていた訳か。

「生きてるって楽しいと思わせてくれるのか？」

「はい！ 絶対に！！」

「無理だよ、そんな事は」

「この世界が自分の思い通りになってもですか？」

嫌らしい笑みで俺を見つめる死神に、眉毛がピクんと反応した。

「どうゆう意味だ？」

「この一週間、あなたの運が急上昇します。それが私の能力…占いだからです！」

占い…？

俺は男だぞ。女じゃあるまいし、キヤーキヤー言っただけで占いの。

「私の能力についてはいずれ分かりますよ」

「よし、百歩譲って一週間後に俺は楽しかったと思った事にしよう。それでも死ぬのか？」

「死にます」

…意味なくねえか？

最初にそんな事言われちゃったなら、やる気なくなつて どうせ死ぬんだから って気持ちにしかならねえぞ？

「魂がループするんだよな？      じゃあ黄泉の国の魂は減らないんじゃないのか？」

「いえ、黄泉にも期限があり、同じ魂が一定期間以上滞在することができません。追加される魂が減れば、黄泉の魂も時間が解決してくれます」

なんとも都合の良いシステムだな。

「魂を追い出す事はできないのか？」

「そんな事をすれば、記憶が残ったままになってしまいます。黄泉では叙情に記憶が削られて行くので、時間が解決するとは、そういう意味です」

ふむふむ、あながち適当なルールってわけでもなさそうだな。

「じゃあ楽しいって思ったなら生かしておけば面倒な事にならないんじゃないのか？」

「いえ、私達の存在が知られては余計に面倒です」

そうか、生まれ変われば記憶は消されるんだからな。

自分達の存在も忘れ、さらに楽しいと思わせる事で生まれ変われば黄泉に魂を蓄積せずに済むと言うわけか。

…なるほど。

ようやく理解できたぞ。

今まで人生をつまらないと思ってきた奴ほど、コイツらの能力を堪能できる期間が長いと言ってたな。

そして俺は上限の一週間を手に入れた。

どうせだったら一週間楽しませてもらうとするか。

「ヨロシク頼むぜ、死神さんよ。俺を満足させてくれ」

「もちろん、そのつもりです。申し遅れましたが、私の名前はミントです」

「俺は片瀬 光一（かたせ こういち）だ」

これが、俺とミントの初めての出会いだった。

ブローグ・お前が…死神？（後書き）

これはコメディかなf^\_^でもコメディが一番書きやすいので、このジャンルにしました。これからお付き合いしてくれる嬉しいです

## 一日目／友情運上昇中！

朝、やかましい目覚まし時計の音で目を覚ました。

普段は意識が覚醒するにしばらくぼーっとする。

だが今日の俺の目覚めは最強だった。

ワクワクするのである。

今日一日、ミントが何をしてくれるのか！

「おはようございます。昨日はなかなか寝付けなかったようですね」  
クスツと笑ったミントがリビングで朝食の準備をしているようだ。

味噌汁の良い匂いが空腹の俺の鼻をくすぐる。

ウサギさんの刺繍が入ったピンク色のエプロンを腰に巻いたミントが朝食を運んでくれた。

白米、味噌汁、目玉焼きにサラダ。それにコーヒーと、オードソックスだが、洋食派の俺には充分だった。

「おいしいですか？」

「…うまい！」

お世辞でも何でもなく、純粹に旨い。

がつがつと胃袋に流し込んだ。

「ふふ、良かったです」

俺の食べっぷりを見てミントも嬉しそうに笑った。

………何だよ、この同棲初日のカップルみたいな光景は。

意識すると何やら照れ臭いので、さっそく本題に入る事にした。

「ミント、今日が一日目なわけだが…一体どこがどうなるって言うんだ？」

まさか、ミントが作ったこの朝食がそれなんじゃないだろうな？

これはこれで嬉しかったが、もしそうなら期待外れだぞ。

「はい。じゃあ、これの内どれか一つ引いて下さい」

ミントは鎌を召喚させた時と同じく、黒いホールからトランプサイズのカードを七枚取り出した。

裏返しに並べたカードの内、左から二番目のカードを何となく選択した。

手に取りひっくり返してみると、そこには 友情 と書かれていた。



「一日目は 友情運アップ です」

友情：だと？

待ちやがれ、俺には友達がいらないんだぞ？

その理由が人付き合いが面倒だからだ。

人は裏切る醜い生き物である。だったら最初から関わらなければ良いだけの話。

所詮は他人を利用していただけなのだ。

人はなぜ友達を作る？

- ・ 一緒にいて楽しいから

- ・ 相談に乗ってくれるから

まあ、大体そんな所だろう。

だが、どうだろう？

果たしてこの理由は自分の為に利用しているだけとも言えないだろうか？

自分が一人じゃつまらないから友達と一緒に居るんだろ？

自分の不安を誰かに聞いてもらいたいから友達がいるんだろ？

綺麗事ばかりじゃねえか。そういうのを利用して言うんだ。

俺は人に利用されたくない。それこそが友達を作らない理由だ。

「冗談じゃねえ。俺は友達なんか……」

「いいから！ 早く学校に行きますよ。準備して下さい？」

俺の言い分などお構いなしに話を進めるミント。

登校時間は刻一刻と迫っているが、遅刻上等サボり上等の俺にとっては慌てる必要がない。

自転車通学であるため、電車の時間も気にしなくて済む。

あくまでも自分のペースで支度を終えた俺は、ようやく家を出た。

途中、昼飯を買う為にコンビニに寄った。

少し遅れての登校だったため、俺の通う高校から最寄のコンビニは、朝の通学ラッシュで立ち寄る学生に殆ど人気商品は買われている。

すぐには商品も追加しないだろう。ここは無難にノリ弁で良いか。

俺はノリ弁とコーヒー牛乳を持ち、レジへ向かった。

その時…顔全体を覆い隠す黒いマスクを被り、全身黒づくめで手にコンパクトナイフを持った、明らかに誰が見ても分かる強盗が入ってきた。

店内には客は俺一人。ミントは見えていないだろうからな。

それに店員は二十歳くらいのフリーターと、気弱そうな店長のたった三人…と一人。

「動くなあ！　　おう、金出せ！　　レジの金全部だぞ！」

ナイフを店長に向け脅す強盗。

こんな事件に巻き込まれたのは人生初である。

と、言うよりも本当にいるんだな、コンビニ強盗なんて。

俺だったらコンビニなんかじゃなくて銀行に押し寄せるけどね。

どうせ犯罪犯すんだったら規模も大きくなっちゃ。

まあ良い。店長も店員もバンザイしてるし、　死なない俺　が何とかしてやるかな。

「辞めなよ。すぐ出てけ」

「…っああ！？　　なんでガキが！　　刺されてえのか！？」

はっ、刺されたって俺は死なないんだよバーカ。

「てめえ…オイ！　　このガキが刺されなくなったら早く金出せ！」

強盗は俺の首に片腕を巻き付けナイフを突き付けてきた。

どうやら人質に捕られちゃったみたいだな。

「…………能力発動」

ミントが呟いた。

その瞬間、自動ドアが開いた。

入って来たのは警察ではなく、俺と同じ制服を着た奴だった。

「こ…こ…こう…いち…くんを…は、離して…離せ！！」

手足がガクガクと奮え、今にも泣き出しそうな声で言った。

俺の名前を知ってる…？

もしかして同じクラスか？

まあ大体の奴は名前どころか顔すら覚えていないからな。

それにしても、何しに来たんだコイツは。通報したのか？ 何の

策もなしに出て来たんだったらただの馬鹿だぜ。

「なんだあお前は？ 　　ったく…最近のガキはよく分かんねえぜ！」

「離せ…光一君を離せ…離せええー！！」

もはや泣きじゃくっているが、そいつは強盗にタックルした。

その拍子に俺は強盗から解放されたが、予想しなかった不意打ちの行動に慌てた強盗の持っていたナイフが、そいつの腹に……。

「うつ……ぎゃああああ……あ……あ」

自分から流れる大量の血と余りの激痛に、そいつは腹を抱えてうずくまってしまった。

その隙に通報した店員を見て、慌てて強盗は逃げて行った。

さらにその背後に店長が投げたペイントボールが命中した。

一目散に逃げていく強盗を尻目に、倒れたそいつの救助に向かう。

「おい！　大丈夫かい！？」

店長の呼びかけにも、うめき声で返事するのがやっとのようだ。

……馬鹿が！

何の勝算もなく出て来たって言うのかよ！

俺にまかせとけよ！

俺は刺されたって死にはしねえんだよ！

他人が倒れようが、くたばろうが、今までの俺なら特に気にも止めなかっただろう。

酷いと言う奴も居るが、これは誰にも否定できないし、酷いと言う奴だって実際の所は見て見ぬフリだ。

例えば、このコンビニのレジの隣に設置されている募金箱。

これにわずかでも金を寄付すれば、世界中の貧しい国で助かる人間は大勢いる。

だが、わざわざコンビニに来て何も買わずに寄付金だけ置いて帰るような、そんな奴がこの世にいるだろうか？

……いない。

居たとしたらそいつは相当なお人よしか馬鹿かのどちらかだ。

まあ後者として見られるだろうな。

他人が死のうが飢えようが、病に苦しもうが…俺達は知った事じゃない。

せいぜい十円くらいの小銭が、つりとして出た時に寄付し、ああ、良い事をしたなあ　と自惚れるのが関の山だ。

だが、今のこの瞬間に死ぬ人間は何百といえるにも関わらずだ…。  
俺達は平気で笑ってる。

何故？

自分じゃないから。

自分には関係ないから。

痛むのは自分じゃないから……………！！

そう、痛み苦しんでいるのは刺されたコイツだ。  
刺されていない俺は痛くもない。

痛くもないはずだが…！

何だ、この涙は！？

何で、こんなに胸が痛いんだ！？

まるで刺されたかのように……

痛い！　胸がズキズキと脈をうつ。

実際、本当に刺されたコイツの痛みとは比べ物にならないだろうし、  
これはまた別の痛みだろう。

「救急車が来ました！」

放心状態となっていた俺は、店員の声で現実世界へ意識を戻した。

「うう…い…たい…」

「喋らないで、大丈夫。死なないからね！」

「酷い出血だな…。身元を調べて家族に連絡を！」

慌ただしくも、手際良く仕事をこなし、そいつはタン力で救急車まで運ばれた。

「待って下さい！　俺も連れてって下さい！！」

自分でも分からないが、勝手に体が動いていた。



「君は…同じ制服？　この子、知り合いかい？」

救急隊員が問い掛ける。

知り合い　じゃないさ。

「友達　です…！」

――――。

結局、そいつは意識不明が続き、危ない状況だったが、何とか一命は取り留めたと聞かされた。

さすがにその時は安堵の表情が過ぎる。

駆け付けた両親と共に、ずっと待っていただけあって、緊張の糸が切れたのか俺はその場に座り込んだ。

「ありがとう、きみ。え…と。名前は何だったかな？」

そいつの父親が俺に喋りかけてきた。

「光一って言います。すいません、俺のせいで…」

「そんな光一君が謝る事なんてないのよ。それより、たつくんは良いお友達を持ったわねえ」

母親が優しい表情で俺を慰めてくれた。  
たつくんとは呼び名だろうか？

「ああ、達也<sup>たつや</sup>が珍しく寝坊したと思ったたらまさかこんな事件に巻き込まれるとは思わなかったけどな。光一君がA B型で良かったよ。輸血が足りないって言われた時は覚悟したからな…！」

「いえ、そんな…当然の事をしたまでです」

俺は達也の血が足りないと言われ、真っ先に自分の血を使ってくれと申し出た。

たかがそれだけの事で、何を俺は偉そうな事言ってやがるんだ。

「達也君が目を覚ました」

看護婦がそう報告に来たのは夜10時を回った頃だった。

俺と両親は達也を覗き込むように見た。

「よかった…光一君、無事で…」

散々両親を心配させておいて、第一声がコレだ。

「馬鹿野郎！ 何で俺なんか庇ったりしたんだよ！」

安静にしないといけない事や、大声が傷に響く事など分かっている。  
だが、これだけは聞かずにはいらなかった。

「光一君…いつも教室で…つまらなそうだったからさ…。これでも  
し光一君が死んだら…勿体ないと思って…さ」

涙がまた出てきた。

馬鹿野郎にも限度つてもんがあるだろうが。

「…心配かけやがって」

そして、病室は笑顔に包まれた。

もう夜遅いとの事で、俺は達也の父親に車で家まで送ってもらった。

母親は病室に泊まるらしい。

部屋に着くなり、さっきから気になっていたが、人前だったので聞  
けなかった事をミントに尋ねた。

「達也が刺されたのは俺のせいなのか？      お前の能力が原因なの  
か？」

「…さあ？」

「さあじゃねえ！      惚けるな！」

「他人がどうなろうと、知った事じゃなかったんじゃないですか？」

「……ぐっ！」

「安心して下さい。刺されたのは能力のせいじゃないです。あれは事故です」

ミントをどこまで信用して良いんだ？

仮にもコイツは死神なんだ。

言った事を丸々信用するのは辞めた方が良いのかもしれない。

「それより、友達のありがたさが分かっていただけでした？」

「ああ、充分すぎるほどな。だが楽しくもないし、死んだらまた生まれ変わりたいとも思わなかったぞ？」

「全然分かってないです！。達也君を守りたいとか思わないんですかー？ 友達を守りたいって思うのが人間ですー」

……ミントに言われなくなつて、そんな事は気付いていたさ。ただ、当たり前過ぎて言葉にならなかったただけだ。

「死んじやつたら誰が残された人を守るんですかー？ 光一君にだって、できる事は山ほどあるです。今日は初日なので、その事を自覚して欲しかったんですー」

俺は勘違いをしていたようだ。ミントが言う楽しさと言うのは、快樂だけを言うもんじゃなかった。

そして、生きる上で最も大切な事は、自分以外の人を守りたいという気持ちなのかもしれない。

## 二日目／恋愛運上昇中！

昨日の疲れからか、今日はすっかり寝過ごしてしまったみたいだ。

時刻は朝9時。学校はとつくに始まっている。

「疲れてたみたいなので起こせなかったです。今日はゆっくりしていても構いませんよ？」

「いや、良い。大丈夫だ。学校にも行く」

俺は重い体を起こした。

「じゃあ今日は六枚の中からどうぞ！」

今日こそは昨日みたいに誰も巻き込みたくはないな…。よし、一番右のカードだ。頼む！

「…恋愛？」

「二日目は恋愛運アップですー！」

恋愛か…。うん、死ぬ前に一度は恋をしてみたいものだ。

そして昨日の達也じゃないが、誰かの為に尽くしたいと思える異性に巡り会ってみたい。

「じゃあ学校行くですね。朝食はできてますが、どうしますか？」

「いただくよ。昨日の朝から何も食べてないからな」

俺は遅目の朝食を済ませると、自転車を漕いで学校に向かった。

「ふぁー。大きい学校ですね」

ミントが驚くのも無理はない。稀にみるマンモス校だ。生徒数およそ四千名を越え、有名な進学校だ。

まあ実際の話、大金さえ払えば誰でも入れちゃうんだけどね。

俺は三年なので、三号舎に入り、階段で教室のある階まで上っていく。

ーガラガラ

授業中に場違いな程の音がクラス中の注目を集めた。

誰からも声はかからない。

「おはよう、光一君」

「おせえよ光一！　もう10時だぜ？」

あ、あれ…？

だがすぐに先生からの冷たい言葉が飛び交う。

「光一君、昨日は大変だったね。それでも学校に来るとは立派だ。だが、授業中の居眠りは許さんぞー。はっはっは」

何だ何だ？

今日の皆はどうしたってんだ？

俺は首をかしげつつ席に座った。

授業は数学の時間だ。いつもなら窓の外の景色を眺めている所だ。

だが、今日はなぜか黒板と睨めっこをしていた。

やべえ、全然分かんねえ。

俺って馬鹿だったのか。

いや、授業なんて出席しているだけで受けてないんだから当然か。

「この問題、わかる人ー」

先生が声を上げると、クラスの8割の奴らが挙手した。

ええー…皆分かるの？

って、まあそれも普段から授業聞いてりや当然か。



授業終了を告げるチャイムがなり、休み時間となった。

「数学、全然分らないみたいだね。テスト近いのに大丈夫？」

隣の席の子が話し掛けてきた。

肩まで伸びた艶のある漆黒のストレート。綺麗な肌。パツチリとした二重。プルンとした唇。おそらく可愛い部類に所属されるだろう。

「ちょっとヤバイ…かな」

「……え!!??」

ん？ 何か変な事言っただろうか？

女の子は有り得ない程のオーバーアクションで驚いている。

「どうかした？」

「ううん、何でもない。光ちゃんが返事してくれたの初めてだから嬉しくって」

「光ちゃん…？」

「あわわ…ゴメン！」

「いや、別に構わないけど。あ、この問題の解き方、分かるかな？」

「え、分かるよ」

「ちょっと教えてくんねえ？」

「ええー！！？？」

だから何でそんなにリアクションが大きいんだよ。  
ちよつと聞いただけじゃねえか。

「うん、うん！ 全然良いよ！ これはね、この記号をこの数字に置き換えて…」

「おおー、なるほど。この3！の！ って3を強調してるんじゃないんだね」

「プツ、ってかそれ知らないってテスト大丈夫？」

「うん、だからヤバいんだって」

そして俺は休み時間の度に女の子に勉強を教えてもらった。

そっかそっか、いやゝ数学も公式が分かれば解くのも何か面白くなってきたぞ。

いつしか授業が終わるのが楽しみになってきている俺がいるではないか。

「じゃあさ、次はこの問題なんだけど」

「ちよつと光ちゃん、もう学校終わったよ？」

「え？ あれ？」

いつの間にか学校が終わっていたようだ。慣れない頭を使ったせい  
か、少しクラクラする。

「あの…その…まだ勉強したいんだったら…教えても良いけど…」

「マジ！？ じゃあ頼むわ！」

「でも今日教室は受験を控えた進学組が居残るから使えないんだっ  
て。どうする？」

「うーん…あ、俺ん家はどう？」

「…え？ あの…私達まだ付き合っていないのに…その…」

はて？

女の子は異性の家に行くというだけで、こんなにも表情が一変する  
ものなのだろうか？

「あ、ゴメン。嫌なら…」

「嫌じゃない！ 行きたい」

彼女の勢いに、今度は俺が気持ち負けしたのだった。

—————。

「どうぞ」

「お…お邪魔します」

自分で脱いだ靴を丁寧に整える彼女。この子は良い子だなあ。

「広くて綺麗だね。でも、何もないね」

とりあえず反応はミントと一緒に。まあ誰が見たってそう言うだろうな。

そして勉強に夢中になった俺が気付いた時には、夜はすっかり暗くなり、時計の短針は9時を指していた。

「どうしよう…！ もうこんな時間？」

「あ、ゴメン。家族に心配かけちゃうよね。送ってくよ」

「……違うね。……電車がもうないの」

…なんてこったい。

「じ…自転車ですってこれから、ね？」

「私、電車で一時間かけて来てるんだ。たぶん無理だよ、そんな距離」

……アウチ。

「と、とりあえず家族に連絡を……」

「携帯の充電切れちゃってるの」

「うちの携帯の充電機使い……」

……僕、携帯電話持ってません。

「……………」

「……………」

気まづく重い空気の中で沈黙が続いた。

「と……泊まってこうかなあ……なんて」

沈黙は彼女の声で破られた。

……今、何とおっしゃいました？

泊まってくだと？

「明日は土曜日だから学校もないし……だ、駄目かな？」

上目使いで聞いてくる彼女。ここで断ったら彼女は夜道一人で路上をさ迷う事になるだろう。

「あ、全然いいよ。誘っちゃったの俺だしさ」

「ありがと。じゃ、お風呂借りるね」

彼女はパタパタと風呂場にかけて行った。

「良かったですねー。きっと彼女、今頃念入りに体洗ってますよー」

彼女からは見えないが、ずっとミントは居たのだ。  
何も喋らず、動かず、ただジッと座っていた。

「どうゆう意味だよ」

「これだから彼女いない歴〃年齢は困りますー」

小ばかにするようなミントの口調にイラッときたが、おとなげないので何も言わなかった。

待つ事一時間半。ようやく彼女は風呂から出てきた。

その間俺はずっと勉強の復習をしていたのだが…。

女の子の風呂とはここまで長いのか!?

途中のぼせたのかと心配になって何度も見に行こうかと思ったほどだ。

「遅くなってゴメンね」

「うっん、大丈夫だよ。じゃあ俺も入ってくるね」

「よく洗ってきなよ」

ミントの声に押されるように俺は風呂場へ向かった。

時間にして15分も経ってないだろうか。そんな感じで風呂から上がった。

「もう出てきたの?」

そんなに驚く事ですか?

「もうちよつとでできるから待っててね」

ほのかに香るこの匂いは…。カレーか。

どうやら俺が風呂に入っている間に夕飯の準備をしてくれていたようだ。

俺は料理が出来上がる間、何か手伝おうかと台所へ向かったが追いつ返されてしまったので、仕方なくテレビでも見て大人しくしている事にした。

しかしもう11時だろ?

こんな時間に面白いチャンネルなんて…

「芸人対決ー!」

適当にチャンネルを回していくと、ちよつと毎週見ている芸人が弄られて無様な姿を人前に露出する番組だ。

実にくだらないが、そのくだらなさを見に毎週視聴率を上げてやっている。

…待て。

待て待て待てえーい。

この番組って確か9時から放送のはずだぞ。

何でこの時間にやってるんだ？

……まさか

「……ふっ」

ミントが憎たらしい笑顔で時計の針を2時間戻した。

なるほど、君の仕業だったんだねえー。

本当は今9時なんだね。つまり7時の時点では電車はあったと。

怒鳴り散らしたい。

でもミントの存在がバレるから怒れねえ…。

「あれえー？ この番組って私も好きで毎週見てるけど、こんな時間にやってたっけ…？」

ヤバイ！ 疑い始めてる！

「え…と。プロ野球の放送で延長したらしいよー」

「そっかあ。私あんまり野球見ないから延長されると困るんだよねー」



ナイス言い訳だ俺！  
今日は冴えてるぞ！

俺は彼女が台所に戻った瞬間、慌てて時計の針を2時間進め、テレビを消した。

「出来たよー！」

彼女がカレーと白米を盛った皿を運んできた。

見た目は旨そうだが味が悪いってオチもあるからな。

「いただきまーす」

一口食べてみる。うん、ぶっちゃけ普通だ。少し甘めで、まあ旨い  
と言えは旨いな。

「ど…どう？ 初めて一人で作ったんだけど…。おいしい？」

「これ初めて作ったの！？ マジ超うめえ！」

少し大袈裟だが、言葉自体に嘘偽りはない。

「本当？ よかったあ」

ホッと一安心したように彼女も食を進める。

「あ、ねえ。一つ聞きたいんだけど良いかな？」

「は、はい！　何でしょうか？」

なぜ敬語になるんだよ？

そんな改まって話すような事じゃないんだが…。

彼女は緊張した表情で俺を見てくる。

「名前…何て言うの？」

「……………え？　ええええええ！？」

な、何！？

あれ、俺今度こそ悪い事言っちゃった？

「ああーその、ゴメン」

「うう…ふえーん。酷いよお」

「わああー、ゴメン！　マジでゴメンなさい！　だから泣かないでよ、ね？」

「なんで名前も知らないの？　ずっと……………ひっく、…光ちゃんの…もしかしたらって思ったのに…」

うわぁーこつゆう時どうすれば良いんだよ…。

とにかく、この子の泣いている顔だけは見たくない。  
何故だかは分からないが、いつも笑っていて欲しい。笑顔でいて欲しい。

俺が泣かせちゃいけない。

俺が笑わせなければいけない。

不思議だ…。初めての感情だ。

昨日とはまた別の痛みが胸を刺激する。

「ホンツとスペシャル・KY（スペシャル・空気読めない）ですね  
ー光一君は」

おお、ミント。助けてくれ。こつゆう時どうすんだ？

ミントの声は彼女には聞こえないものの、俺が直接ミントに返答できるはずもないので、心の中で俺の気持ち伝わるように必死に祈ってみた。

「彼女の鞄をみるですー」

え？ 鞄？

学校に行く用のスクールバッグというやつだろうか。

紺色のそれに白いペンで書いたのであろう落書きがあった。

その中心に、     サキ・ミサオ・アイ・ユウ・ハヅキ・仲良し   と書いてあった。

うーん、どこかで聞いた事ある名前ばかりだが…五分の一の確率か。あまり勘は鋭い方じゃないんだよねあ。

よし、どうせならこの中で俺がパツと見気に入ったのにするか。

「あーゴメン。今思い出した！     ハヅキちゃんだよね!!」

「……うん。葉月だよ。もう、名前すら知らないのかと思っちゃったじゃん」

しゃああー！

五分の一引いた！

「ま…まさかあ。ちよつと忘れしちゃっただけだって。あ、食器洗いぐらいは俺がやるからさ、休んでて」

重苦しかった空気から逃れるように、俺は綺麗に完食したカレーの食器を台所に運んだ。

洗いものと言っても食器自動洗浄機があるので苦労はしない。軽く水でゆすぎ、洗浄機の中へ入れた。

リビングに戻ると、葉月が眠そうに瞼を擦り、大きな欠伸を一つした。

「ふぁー…あ、ゴメン。眠くなっちゃって…」

俺の為に必死で勉強を覚えてくれたんだ。きっと疲れたんだろう。

「じゃあ寝ようか……あ」

しまった。生活に必要な最低限の物しかない俺の部屋にはベットが一つしかない。

客人用の毛布や布団なんかは一切ないぞ…。

「ベット使って良いよ。俺はソファで寝るから」

「うん、ありがとう」

素直にベットに潜り込む葉月。俺もなんだかんだで疲れている。ソファに倒れ込むように横になって目を閉じた。

「おやすみ」

「おやす…って、え!?!」

葉月が驚いた声を上げ起き上がる。

「光ちゃん、毛布は？」

「ああ、毛布はないんだ」「何考えてんの!?! 十一月って言っても夜は冷え込むよ?」

「大丈夫大丈夫、そんなの気にしないで…」

「ダメ。体壊しちゃう。……………こっち、来て？」

葉月はモジモジと毛布で口の部分まで隠して言ってくれた。  
うー…さすがに寒さには勝てないしなあ。

「じゃあお言葉に甘えさせてもらおうかな」

失礼しますよとベットまで足を運ぶ。

自分から誘ったくせに俺が隣に入ろうとすると、葉月は体をビクッと反応させた。

葉月は俺が入りやすいように気を使ってか、それとも照れているのか、落ちそうなくらい隅に寄って背を向けてしまった。

「じゃあ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

……………。

寝れねえ！！

ダメだ、どんなに頑張っても、目を閉じてみても、葉月の事が気になって仕方がない。

葉月はもう寝てしまったんだろうか…？

寝息一つ聞こえてこない。聞こえるのは、俺のやたら大きい心音だけだ。

「葉月…寝ちゃった？」

一応、もし寝ていて起こしちゃったら迷惑なので、できるだけ声を潜めて言った。

「う、ううん。何だか緊張して眠れなくなって…」

「そ、そうか…。俺もだ」

沈黙…。ただ、葉月の名前を知らない時に訪れた重い空気とは違うのが分かった。

何と言えば良いだろう…？

沈黙なのに居心地が良い。

初々しさからくる温かい沈黙…。そんな感じ。

「光ちゃんは…は、初めてなの？　女の人と一緒に寝るのは」

「あ、ああ。初めてだ。葉月は？」

「……………前に一度だけ」

おっと、女の子にこんな事をいきなり聞くのはデリケートが無さすぎるか？

「あ、ゴメン。そんな事聞くなんて…」  
「優しいんだね」

優しい？ 俺が？

そんな事を言われたのはもちろん初めてである。

「もっと恐い人かと思ってた。誰が話し掛けても、誰にも返事してくれないし。いつもボーツと窓の外を見るだけで、授業が終わったら帰る。そこで次の日また学校に来て、同じ事の繰り返し…。」

そうか、葉月の席は俺の隣だもんな。ずっとそんな俺を見ていてくれてたんだ。

「今日、やっと返事してくれた時は嬉しかったよ」

――頭の中に映像が甦る。

くだらねえ…つまらねえ…

「また遅刻してきたぜ、光一の奴」

冷たい視線で、人を見下したように…

待て、表情が違うぞ…

「おっせえーんだよ！ もう二時間目だっつつの！」

笑ってる。よく見たら笑ってる。



嫌味の笑顔じゃない。

俺を友達として見る目…。

馬鹿。馬鹿か、俺。

皆は今まで、普通に俺に声を掛けてくれてたじゃないか！

それが、その笑顔が見えない程、俺は腐っていたのか？

あぶねえ…あぶねえよ！

知らない所だった。気付かないで死ぬ所だった。

馬鹿！ 俺って奴は…

――――

「光ちゃん？　ど、どうしたの？」

俺は泣いていた。

自分の愚かさに。

これじゃまるで劣等だ。

「ゴメン、ゴメン、皆…」

劣等は俺だ。皆は良い奴だった。

「大丈夫だよ」

一言。たったその言葉だけで、この心が満たされるのには事足りた。

「……葉月!!」

抑え切れない何かが込み上げてくる。

気が付くと俺は力いっぱい葉月を抱きしめていた。

「……ん。…良いよ」

え？　　良いよって…あれ？　　え？　　何が？

抱き着いてみたが、どうすれば良いのか分からず、ミントを見る。

すると、どうだろう。

さっきまではボケーっと退屈そうにしていたミントの瞳がキラキラと輝いている。

この展開、待ってましたと言わんばかりに。

そしてミントは、憎たらしい笑顔を浮かべ

「GO！」

と親指を立ててきた。

俺は理性を捨て、体の自由を本能に任せる事にした。

無知な俺は女性のみが身につける上半身の下着の外し方も知らないはずだった。

それが本能の嗅覚を研ぎ澄ませば、頭に過ぎる。後は体が勝手に動く。

その手は止まる事を知らずに下半身へと伸びる。  
――性感帯。

これだ。この突起物。  
触れた時の葉月の反応で分かった。

待て――い！

ノクターン行きになるぞこの小説！！

――

疲れ果てた俺と葉月は、グッスリ眠り朝を迎えていた。

ああ、申し訳ないが夜の事は省略した。

時計は12時前だったが、ミントが時間を進めていたから実際は10時前だろう。

少し不安だった事があるが、それは解消された。

それは、ミントの能力のルールである。

初日は友情運、そして二日目は恋愛運を急激に上昇されたわけだが。

日にちが過ぎても効力はリセットされない。

もし仮に、能力のおかげで葉月と関係を持ったとするのならば、深夜12時をまわった所で葉月に何らかの影響が出なければいけないからだ。

百年の恋が冷めるかのように、ふと熱がひく。

葉月にそんな動作は見受けられなかった。

もしやこの一週間は一日に一つではなく、一日に一つずつ、選択されたジャンルの運が上昇していくのかもしれない。

「おはようございます。昨日は頑張りすぎですよ。気を使って隣の部屋で耳塞いでたのに意味ないくらい大きい喘ぎ…」

「ああー言っな、それは」

ミントか。こいつら死神には睡眠は必要ないらしい。

俺は服を着て、葉月を起こさないように気を使いながら立ち上がった。

「どうでしたか？ 恋愛は？」

「うん、悪くない。ってかめっちゃめっちゃ良い」

「ふふ、本当は順番がありますけどねー。それが縮小されたからエッチまで結び付いたですー」

「…？ どういう意味だ？」

「今は内緒ですー。それより、彼女には病院を進めるですー。避妊用具付けてないから、もしもがあるです。妊娠しちゃってたら大変ですよ、光一君は死んじゃうんですから」

おっと、そうだった…。

やべえな。もし子供できちゃったらどうしよう…。

俺は父親になるのに責任を背負えず、全て葉月に任せて死んでいくんだ。

最低だな…俺。

「ううん…光ちゃん、誰と話してるのー？」

葉月が目を覚ましたようだ。まだ寝ぼけているからミントとの会話は何とかごまかせそうだな。

「いや、何でもない。それより早く服着ろ。風邪引くぞっ！」

「きゃ、見ないでよエッチいー」

昨日の夜は見られても平気だっただろうが。

なんて言う事はさすがにできないのでアハハと笑っておく。

「あ、今日は午後から予定があるんだった。親にも連絡してないし、私帰るね！」

「おう、駅まで送るよ」

駅までの道のりを、俺は葉月と手を繋いで歩いた。

恋愛とは、これほどまでに素晴らしいものなのか。

今日の葉月は可愛すぎて、胸の高鳴りが治まらない。

握った手から伝わる温かい温もりはなんだ？

強く握りたい。でも、か弱く俺よりも遥かに小さい葉月の手は、握力を入れるだけで潰れてしまいそうだ。

「光ちゃんの手、大きいんだね」

「葉月の手が小さいんだよ」

短くて細い指。

でも、綺麗な指。

「…こんな小さいのに、ちゃんと動くんだな」

「当たり前じゃない、馬鹿みたい」

緩んだ口元。

可愛い笑い声。

「ずっと夢だったんだあー。こうして、光ちゃんと肩を並べて歩くの」

「肩は並んでないけどな」

「どーせチビですよーだ」

俺の肩の隣にあるんだ。

葉月の笑顔が。

速く歩きすぎないように、歩幅を合わせる。

いい…！      いいよ、恋愛！

「あ、光ちゃん。一つお願いがあるの」

「何だ？」

「私以外の人も、仲良くしてね？      友達とか、先生とか」

「うん。分かってるよ。友達を大切にできない奴はカスだ」

「……今までのアナタですよー？」

「ああ、今までの俺はカスだったよ。あと、達也にもきちんと礼をしなくちゃいけないしな」

ふいに、苦しむ達也の表情が頭を過ぎった。

「達也くんが怪我したのは光ちゃんのせいじゃないから！」

「…そうだな、もう大丈夫だよ。他の女の子とかも今までの事怒ってるだろーなー。仲良くしなくちゃなー」



「……………やっぱりダメ」

「どっちだよ!？」

「親密な関係になったら怒るからね」

「…もう怒ってるじゃん」

ハハハ、いやー楽しいな。

なんて事を話しているうちに、駅に到着してしまった。葉月と居ると時間の経過が早く感じる。一人の時はうんざりするほど遅いの。

「じゃあ、またね。光ちゃん」

「おう、気をつけてな」

走り去った電車の背中姿が見えなくなっても、しばらくの間俺は見つめていた。

三日目、金運上昇中！（前書き）

現実にはこんなに上手くいきません（笑）

### 三日目　金運上昇中！

「じゃあね」

「おう、またな！」

俺は葉月が電車に乗った事を確認すると、大きく背伸びをした。

「それでは、今日の運気を上昇させるですー」

ミントがカードを五枚出してくる。

よし、今日はど真ん中のにしようかな。

「…金運？」

うーむ。これはいただけない。

俺は腐る程とまではいかないが、金は持っている方だ。

しかも欲しい物が無いから特に必要としないんだがなあ…。

「これパスできないの？」

「できません。つてか、光一君が想像しない程の大金です。ま、いずれ分かりますよ」

「何をやれば良い？　ちなみにギャンブルはやった事がないぞ」

「んー…。まだお昼ですからね。まずは…ここ入りましょう！」

ミントが指差した先にある建物は…

「じゃんじゃんぱりぱりパチンコ店？」

マジこの中入るのかよ…。

「あ、財布持ってきてねえぞ？」

「そんなの大丈夫ですー。さ、ほら」

ミントに背中を押され、嫌々と店内に入る。

うぎゃー、うるせえ！

耳を塞ぎたくなる程の騒音が鼓膜を刺激する。

煙草の煙で充満した店内。空気がまずい。

どうしよう、一刻も早くここから出たい。

「おーい、ちょっとそこの兄ちゃんよ！」

何だ？ 俺の事か？

パチンコを打っていた作業衣姿で、頭に白いタオルを巻いた三十代の人に声をかけられた。

これは絡まれたのか？

もしやカツアゲされるのか？

パチンコ店にいる人だから柄が悪い人だもんな。あー人間不信。

「な、何ですか？」

「もう休憩終わっちゃうから行かなくちゃいけねえんだけどよ、この台兄ちゃんにやるわ！」

休憩時間の合間にやるなよ。

その台の液晶画面の右上には確変中の文字が。

確か…次回当たりまで手持ちの玉を減らさずにいられるモードだな。

「じゃあな、頑張れよ！」

俺の返事も待たずに、玉が入った箱だけ持って慌てて帰っていった。

丁寧に僅かに玉も残して行ってくれた。なんて親切な人なんだろう。

もし俺がパチンコを打つギャンブラーなら、こうゆう時はラッキーだと思つて舞い上がるのだろうな。

ただ、今の俺にとってはこれは必然だと思えてしまうところが恐い。

えっと、とりあえずハンドルを回して玉を打ち出せばいいんだな。

大当りーー！！

うお！ 一回転目で当たった。 しかもまた確変だ。

何やら訳が分からない内に、次々と玉が出てきては当たりを繰り返

して、結局二時間出っ放しだった。

それで手にした金は

「……四万円」

それがたったの二時間で…。

うーむ…パチンコとは恐ろしいな。

「よし、元金ができましたー。じゃあ次はここですー」

「……ここは」

駅からバスに乗り、着いた先は競輪場だった。

番号の付いた人が自転車に乗ってレースをし、俺達は誰が一着になるかを当てるギャンブルだ。

「二車複…？ 三連単…？ ボックス…流し…わかんねえよ！」

ってかまず買い方すら知らねえよ！

何だよこの紙！ 書き方も知らないのに当たるわけないだろうが！

「大丈夫ですー、適当に書いて買えば。ちなみに掛け金はさっきパチンコ店が出たお金全部行っちゃいましょー」

こういうのって悪魔の囁きって言うんだろうか？

まあコイツは死神だし俺は元々ギャンブルはやらんから聞いた事はないがな。

俺は適当に三連単と言う所に印をつけ、誕生日である四月六日だから4と6、あと一つは次が第8レースだったからそれにした。

一着 4番

二着 6番

三着 8番

の券に四万円を掛けた。

車複しやふくとは一着二着どっちでも良しで、掛けた番号が入賞すれば良い。

車単しやたんはその逆で一着二着をピタツと当てなくてはならない。

例えば、自分の買った券が3・5なら

一着 5番

二着 3番

ときたら、車複なら当たりで車単なら外れになる。

ただし当たり前ながら車単の方が配当金の払い戻しは大きい。

三連単れんたんも三連複れんぷくも同じで、三つの番号を当てるだけだ。

そしてレースが始まった。

ゴール直前の第四コーナーに差し掛かる時に事件は起きた。何と、転倒である。

先頭を走っていた人が転び、それが連鎖を巻き起こしパタパタと次々に倒れていくではないか。

周りのオジサン連中からは溜め息や怒鳴り声上がる中、見事にゴールしたのは一着に4番、二着に6番、三着に8番。俺が買った券と丸つきり一緒。…って事は当たったのか？

「なんだよ、ヨーロッパ来ちゃったのかよ！」

「こりゃ一萬車券だべえ」

「やってられねーよ畜生」

ヨーロッパとは、4・6・8が入賞する事を言う。

競輪は1～9の数字があるが、そのレースの中でも4・6・8には人気や実力が低い選手が抜擢されてしまうので、滅多にこない。

なお、これらの数字が絡んだ時のオッズ（払い戻し金額）はかなり高い。



「第8レースの払い戻し金額は…三連単、23万6千円。三連複…」

場内にワァーと声上がる。

えっと、俺が買ったのが確か三連単だから23万6千円か。おぉー、結構増えたなあ。

「違いますよ。光一君はそれを四万円買ったです。一口百円だから四百倍ですー」

23万6千円×400…?

えーと……

嘘！ マジで!?

九千四百四十万円!?

94,400,000!?

良いのか？　こんなで当たっちゃって？

俺は指定された窓口で券を持っていくと、担当のおばちゃんがそりやもうビツクリな顔をしていた。

そして誰か別の人を呼び出し…

……俺は事務所へ連れていかれた。

恐い人数人に囲まれ小さく縮こまって椅子に座る。

「えっと…あの……その………」

僕はこれから何をされるのでしょうか？

「心配するな、坊主。金は払う。ただ、身分を調べさせてもらっけどな」

やばい、財布は家に置いてきちまったぞ。

スーツを着た人達はパソコンやら電話やらで俺の名前と住所から身元を割り出した。

そして、徐々々に顔が真っ青になってゆく。

「……失礼しましたあ！」

なんか頭下げられたけど、もお恐いよお。

「まさか、あなたの叔父様が…」

ん？ 俺の叔父？

ああ、まあ…あれですよ。俗に言うヤクザのあれです。

「いえ、あの、そんな…」

「おい、早急に金を用意しろ！」

そしてトランクケースにギッシリと万札が詰まったのが三つも現れた。

「帰りに何かあつては大変なので、車の手配もします。どうぞ！」  
言われるがままに車に乗り、わざわざ自宅まで送ってくれた。

部屋に戻ると、俺はベットに倒れ込んだ。

「……どうするよ、これ」

そしてテーブルの上に置かれた大金を見て悩む。

「光一君は欲しい物とかないですかー？」

「あつたらこんな部屋じゃないだろうね」

欲しい物……か。

「兄弟……なーんてな」

もし俺が一人っ子じゃなかったら、こんな荒んだ人間じゃなかった

のかな？

いや、人のせいにはすまい。

俺はふと、人の欲について考えてみた。

そうだよ、欲がないと言うならば、なぜ自分を犠牲にしてまでも人を救わないんだ？

俺は金を持つだけ持ち、貯め、いつか自分の物に使おうとしている。

それは別に悪い事なんかじゃなく、むしろ普通の考えだ。

自分で手にした金を、なぜ人の為に使わなくちゃなんのだ。

ただ、そんな世界から嫌気が差していたはずだ。

俺は家の電話を手にした。

「もしもし？ 救助センターの方ですか？ はい、ええ。94, 400,000円、全部。…え？ 嘘じゃないですよ。寄付します。」

救って下さい。救いを持っている人達を」

#### 四日目〱仕事運上昇中！

「光一君、変わったですねー」

朝、目が覚めるなりにミントが言ってきた。  
お、今日の朝食はオムライスか。

「うん、それは自分でも思う。…いただきます」

以前の俺とは、明らかに何かが違う。  
変わってきている。世界じゃない。俺がだ。

やはりミントの登場だろう。あれが肝。もしミントがあの時来ていなければ俺はこんな気分になれずに死んでいたんだから。

楽しい。

素直に、生きている事が楽しいのだ。

ただ、そう考え直した所で遅い…。俺は今日を入れたら後四日で、  
確実に死ぬのだから。

そうゆう約束…。しかたない事だ。

ただ、不安ではない。  
むしろ安心しているくらいだ。

ミントは言った。魂はなくなる。生まれ変わる…と。

OK、それで良いじゃないか。

姿形は変わっても、また《俺》に近い存在の奴が生まれるんだ。

それはどこか分らない。もしかしたら日本じゃないかもしれん。

だが、良いではないか。

俺は今、ミントにとてつもなく感謝している。

「では、残り四枚のカードから選んで下さいー」

こんなにも素晴らしい力で俺を楽しませてくれるんだから。

「…仕事？」

「四日目は仕事運上昇ですー」

仕事…と言われても俺の職業は学生である。

まあ清掃員のバイトをしているにはしているが…。

正直、仕事〃大変と言う方程式が頭に執着しており、生きるために《仕方なく》働くようなものだ。

今日は以前に比べたら楽しめそうもない。

しかも今日は日曜日である。せつかく学校が休日だと言うのに、な

ぜ好き好んで働かなけりゃならんのだ。

「ミント、働く事も楽しくなる……のか？」

「なりますよ。させてみせます」

ふむ、ミントがそこまで言うのだからそうなのだろう。

「正確には楽しいよりも、生き甲斐を感じると思いますー」

働く事で生きる事の生き甲斐……か。

まあ良いだろう。俺は生き甲斐がない人間だったんだ。

その時、家の電話が鳴った。

「はい、もしもし。……ああ、叔父さん」

電話の相手は、俺がバイトでお世話になっている叔父さんだった。

職業は……昨日の事もあって分かっていると思う。

「ちと人手が足りん。今から来れるか？」

もちろん、こんな急に頼まれる事は初めてである。

そもそも俺はそう言った人柄の方達と同じ仕事をする気はないし、苦手なのだ。

人目がつかない場所の清掃員になったのはそれが理由でもある。

「人手って、まさか俺に……」

「心配するな！ お前にやらせる仕事は関係ない。ワシの友人の工場でな、ちよつと手伝ってほしいとの事じゃ」

工場……？ 薄汚い作業服と帽子を身につけて、機械的な動きで一定の事しかやらない仕事だろ？

なんか……ヤダなあ。

「まあ、叔父さんが言うならやりますよ」

「助かる。場所は……」

はあ、結局引き受けちまったか。まあいいだろう。

「光一君、さつき頼まれた時に嫌な顔してましたねー」

「当たり前だろ。工場なんて、どうせ機械的な作業なんだ。やっていてつまらん」

「そう思えるなんて、人間の心になりつつありますー」

……！！

言われてみれば、確かにそうだ。  
あれやれ、これやれと言われたら、はいはいと聞いて熟すだけが今までの俺だった。



少し難しいが、機械的な作業は嫌だと思えるって事は、自分で考えて動きたいって事だ。

俺は確実に人生に興味を持ち初めている事をハッキリと自覚した。

案内された場所に着くと、早速ニツカを履かされ、帽子と耳栓を渡された。

うわー…このニツカぶかぶかじゃん。でも俺の雰囲気になんと似合っているな。

余談だが、ニツカの正式名称は《ニツカ・ポツカ》と、ちょっと可愛らしいネーミングだ。…って、誰に言ってるんだ俺は。

「よろしくな、光一君。俺は石川<sup>いしかわ</sup>。じゃあ下に行くから帽子被って耳栓つけて」

石川と名乗った男は、すこし老けた顔立ちだったが、実際は高校生らしい。

ちなみに今は二階の休憩室にいる。ここは静かだが、下で動く機械達は、パチンコ店とは比べ物にならないくらいうるさい。耳栓は必需品だな。

この工場の仕事とは、主にプラスチックの加工処理らしい。

俺の背丈と並ぶくらい大きなトイレットペーパーみたいな形が20倍の大きさのプラスチックをチップ状に砕き、溶かし、固める。それがまた元の原料に戻るというわけだ。

俺に任された仕事は、まず馬鹿でかいロールをカッターで切る。

切った品物を粉碎機と呼ばれる所にプチ込む。たったそれだけだ。

ただ、この粉碎機、ちょっと恐い。

中でカッターが超高速で回転しており、入れた品物を凄まじい勢いで喰らっていく。

そして砕かれたチップがエアで配管を通り、次の機械に送られるらしい。

一時間程作業をした所で石川さんから声が掛かった。

「休憩行くよー」

「はーい」

もう休憩とは…この作業場は何と楽な事か。

「どう？」

「はい、大体内容は分かりましたよ」

「君高校三年生だね？ 同い年なんだからタメ語でいいよー」

石川さんは笑いながらセブンスターに火を点けた。

「最初は慣れない筋肉を使うから疲れるけど…まあ慣れだから。他のトコに比べれば、ウチは楽だと思うよ？」

フーと、肉眼で確認できるため息の如く吐き出した煙は宙に舞い、上空に昇るにつれて消えていった。

「タバコ…吸う？」

「あ、俺は吸わないんだ」

「そおなん？　偉いんじゃない？」

偉い…というか、なんというか…。

まあ単純に体に毒だからだ。…と、俺はもうじき死ぬから体に気を使う必要はないのか。…うーむ。

「ういー、ヤニ切れ！」

「ああーマジ気に入んねえよあの機械！」

休憩室に二人入ってきた。確か、髪が長いのが一葵<sup>かずき</sup>で、体格の良い奴<sup>やつ</sup>が勇貴<sup>ゆうき</sup>だったな。

皆高校生らしい。

ってか全員休憩しちゃってますけど、機械は放置で大丈夫なんだろうか？

「どうした勇くん？」

「トラブリやがったから放置してきた」

「そうゆう日もあるよ。今光一君に色々教えてたところさ」

石川さんに手を向けられ、二人は俺を見る。  
なんとなくだけど頭を下げておいた。

「まあ楽にやつてよ」

「そうそう。ただし、楽するとサボるは意味が違っからな！」

笑いながら二人はタバコに火を点けた。ここの奴らは皆セブンスターか。

「俺達が作ってるのってさ、何になってるか分かる？」

石川さんが聞いてくる。

確かロールにUFの印刷がされてたっけ。

「カップ麺の容器…かな？」

「正解。後は、おでんや弁当などの容器もだし…断熱材なんかもあるんだ」

「へえー」

「やり甲斐があるんだよ。スーパーとかコンビニのレジ打ちってさ、客が来たら会計して…とかだろ？」

でも、売られている商品造りに自分が関わってるってなったら凄くねえ？

俺、世間に役立ってるって思うだろ？」

うーむ、確かにそうだな。

清掃員の仕事なんて、綺麗にしても綺麗にしても、次来た日には汚れている。

あまり好き好んでやる仕事じゃなかったな。

「さて、そろそろ行くか」

休憩は一時間おきに10分くらい取ったおかげで、時間が過ぎるのも早く、たいした疲労も感じなかった。

ただ、次の日筋肉痛になった。普段使わない筋肉を使ったせいだという事だろう。

でもその痛みも、コンビニで販売されている弁当の容器を見ると、少し和らいだ様な気がしたのだった。

「ミント、働く生き甲斐…分かったぜ」

「ふふ、良かったですねー。さ、今日のカードを選んで下さいー」

残り三枚……か。

それはすなわち、俺のライフポイントも意味しているのであった。

## 五日目　勉強運上昇中！

残るカードは三枚…。

それは俺のライフポイントを現している。

一枚引く度に、命も削られていくような…そんな感じた。

いや、考えるのは辞めよう。ミントの能力で、今を楽しむと決めたんだ。

よし、今日は…このカードだ！

ミントが出した三枚の内、左側のカードを選択した。

「勉強？」

「五日目は勉強運上昇ですー」

ちょうどいい、今日から期末テストが始まるんだ。

葉月に勉強を教えてもらったとは言え、今までの勉強を短時間でマスターしたとも言い難い。

良い点数を取れば、教えた甲斐があったと、葉月も喜んでくれるだろう。

「よし、じゃあ学校行くか！」

コンビニで昼食を買った俺は、高校への通学路を歩いた。

今日は学校でテスト前に少し勉強をしようと思ったから、早めに家を出ていたのだ。

しかし、さすがに早く着きすぎたか？ 教室にはチラホラとしか生徒は来ていない。

皆無言で、ひたすらノートに書いたり、プリントを見直したりと重苦しい雰囲気である。

「あ、おはよう。光ちゃん！」

その中に葉月もいた。

席に着いた俺はテストの復習を最終チェックしている。

「今回のテストはやる気あるね。頑張って良い点数取ってね」

「ああ、分かってるよ」

その後は俺達二人も無言になり、プリントを見直す。

一時限目は歴史のテストだ。年表を暗記できれば問題数が多い分、点数を稼げるんだが…。

こんなにたくさんあるもんなあ…。

机の上に広げた五枚のプリント。その五枚、裏表にびっしりと年表が書かれている。



…それが出るんだ？

何気なく一枚のプリントを取って見てみる。

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

…何だ、この感覚は！？

頭の中がスッキリして、一目見ただけの年表が覚えられた…。

目を閉じてみると、その年表に書かれた出来事が浮かんでくる……。

そうか！  
これがミントの能力か。

調子に乗った俺は、次…次…と、プリントを見ては覚えてを繰り返した。

…待てよ、って事は…。

俺はおもむろに教科書を取り出した。

テスト範囲である部分をパラパラとめくっていく。

やはり間違いない。全部覚えられる。

昔テレビで、幼い子供が《記憶術》とか何とかで、本を凄いスピードでめくり暗記するのを思い出した。

その能力を、今まさに俺が使えている。

よし、このペースなら今日の分の……いや、今回の分の勉強を全部暗記してやるか。

「ちょっと光ちゃん、国語は明日だよ?」

「んー、もう今日の分は覚えちゃったから」

「……………は?」

葉月がポカンと口を開けて驚いている。まあ無理もない、つい最近までは基礎中の基礎も知らないような奴が、いきなり勉強できるようになったんだ。

そして全教科の教科書とプリントを全て暗記した。

テストなのに俺だけ教科書を見て受けているようなもんだ。これは凄いハンデだな。

――ーテスト開始。

今日の教科は、歴史、数学、物理である。

歴史や物理なんかは簡単過ぎだ。教科書に出てくる文章がそのまま空白を埋める形の問題となっているため、丸暗記している俺にとつては朝飯前だ。

数学は公式を全て覚えた。

その公式と数字を見てみると、どうやって解けばイイのかが頭の中に浮かんでくる。

ペンは開始から休む事なく動き続けた。止まった時には、答案用紙は正しい解答で埋め尽くされていた。

高校は中学と違い、テストが終われば帰れるため、この日は午前中に帰宅する事ができた。

部屋に着いた俺は本棚から国語辞典を取り出す。  
ちなみに本棚に納まっている本に漫画本はない。

国語辞典、英和辞典、百科辞典の、たった計三冊だ。

その為の本棚はどうかと思うが、きちんと整頓されていた方が良かったろう。

そして、まずは国語辞典をパラパラとめくっていく。

……やはり、覚えられる。しかも尋常じゃないスピードで。

頭が次々と学ぶ事を求めてくる。

だが待てよ。辞書の内容なんて覚えてもつまらん。  
他に本はないのか？

「光くん、そんなに覚えてどーするですかー？」

俺が本に夢中になっていたので暇だったのであるうミントが聞いている。

「死ぬ前にな、この世の全てを知っておこうと思ってな」

「そんな一気に覚えると、能力が切れた時あまりの情報量の多さに脳が破裂しますよー？」

「どうせ死ぬんだから脳が破裂しよう構わん。ミントの能力は一日に一つずつ増えていくんだろ？ だったら、能力が消える時は俺が死ぬ時だ」

「確かにそうですー。先に言ってしまうと《今》を楽しめなくなるんで、あえて言わなかったんですけど…気付いてたんですねー」

「まあな」

「一つ忠告しておきますー。確かに上昇した能力は日にちが経っても継続しますー。ーが、威力は劣れえていきますよー。つまり、初日のような友情運は、今はそれほど高くないという事だけ言っておきますー」

なるほど、これは充分注意しないといけないな。

調子に乗って、今日一日で辞書の全ての内容を暗記するような事をすれば、明日には頭痛やら何かしらの悪影響が出るわけだな。

「分かった。気をつける」

いくら能力があつたとしても、リミットがあるんじゃないか。

元は俺の脳なんだ。人間の脳は忘れやすいようにできている。

忘れやすいように……そうだ！

「ミント、俺は先に寝させてもらつよ」

「まだお昼の2時ですよー？」

「ああ、夢を見たいんだ」

そつだ、人間は一度の睡眠に見る夢の数は計り知れない量の数なんだ。

ただ、起きた時に見た夢の全てを覚えていては頭が混乱する。だから脳が自動的に夢を消している。

よつて忘れた夢を必死で思い出そうとしても無駄なのだ。既に消し去った後。脳が、その夢は《なかった》事にする。

なかった事を思い出すなんて無理に決まっている。

だが、今の俺なら、なかった事にはならない。能力によって上昇した運……もとい、記憶力。

それによつて、夢を覚えていられるとしたら……。

この一眠りの間に、数日分の日数を体感できるかもしれない。

疲れ知らずの今の脳が、どこまで夢を残してくれるか……それを試す

為にも寝てみよう。

良い夢だけじゃないことも分かっている。もちろん、悪夢かもしれない。怖いかもしれない。

それでも、寝る。

全ては夢だと割り切れればいいだけだ。

カーテンを閉めると、曇りだったため、部屋は充分に暗くなった。

30分くらいは寝付けなかったが、意識が遠退いていく……………。

—————

意識が戻った。いや、おそらく、現実世界じゃないだろう。

俺は自分の部屋で寝たのは覚えているんだ。普通なら夢と自覚はできない事が多い。だが、今現在俺の脳は瞬時に判断する事ができる。

今立ってる場所は布団の中でも、俺の部屋でもない。

見覚えがある…どこだっけ？

デパート…そうだ、ここはデパートの中だ。

広いフロアの中には、高級そうな衣服がズラリと並んでいる。

客のほとんどが気品のある婦人で…店員が礼儀正しく頭を下げている。

ここは…一度、母に連れて来てもらった事がある。家の近くの《スターサイド》というデパートだ。

宝石や衣服など、とにかく高級品ばかりを扱う店だ。

思えば、俺がここに来たのは一度きりだった。初めて母と外出をした方がいいが、俺はここで迷子になって泣いてしまったんだ。

まだ三才かそこの餓鬼の頃だった。デパート内には品の良い人達しかいないため、大声で泣きじゃくる俺を汚らしい目で見られたっけな…。

放送のおかげで、すぐに母は迎えに来てくれたが、プライドの高い母の事だ。あの時は自分の息子が恥さらしになって、さぞ恥ずかしかっただろう。

それ以来、母とはどこも出掛けていない。

そんなデパートに、俺は立っていた。店内はムードのある音楽が掛かっており、どこかシーンとしている。

カウンターの横に、日付と時間がデジタルで表している時計があった。

日付は今日だ。時間は、夕方5時。俺が寝たのが大体3時だから…まいったな、まるで現実世界にいるみたいじゃないか。

――居心地が悪い。

ここを出るか？　まあ、夢の中だ。場面転換も早いはず。しばらくすれば、意識も別の場所に移るだろう。

そう思った、その時。鼓膜が破れそうな程の大きな爆発音が聞こえた。

さっきとは打って変わって、慌ただしくなる店内。自分の身が一番である婦人共は、キヤーキヤー言いながらパニックっている。

何だ！？　爆発だと！？

テロか？　いや、そんなはずはない…。

記憶が蘇る…確か、俺が立っているフロアは最上階の四階だ。

一階には宝石店、二階にはブランドのバッグや小物…三階には…レストラン…そうだ、レストランだ！

爆発の原因はそこか！？

十五年前の記憶が、ミントの能力のおかげで、鮮明に蘇る。

ここは夢の中だ。俺は痛みも何も感じないはず。なのに、なぜか妙に暑い。

商品の衣服に火が……。

まずい、火事になってる。

エレベーターもストップしていて、客はさらに慌てる一方だ。



婦人達は気が動転しているのか、非常階段の存在に気付いていない。動かないと分かっているはずなのに、エレベーターのボタンを何度も叩いている。

徐々に煙に被われていくフロア。視界も悪くなっていく。

「みなさん、エレベーターは動きませんよ！ 階段で避難を…！」

駄目だ、俺の声なんざ聞こえていない。

早く…早く！ 今ならまだ間に合うから！

誰か階段に気付けよ！

死ぬ…ぞ？

お前ら死ぬぞ！？

そうだ、店員は？

マニュアル通りの動きしか知らないような店員でも、階段の存在に気付くはず。

どこだ、どこにいる？

……いない？

なんでだよ！ 客を見捨てて自分だけ逃げたって言うのか？

俺は店内を探し回った。

それでも見つからない。

そうだ、こういう店って、防犯用にカウンターの所に通報ボタンとか付いてるはずだ。

俺はカウンターに走った。

そこには、二人の店員が頭から血を流して倒れている。

爆発の衝撃でバランスを崩し、目の前のガラスケースに突っ込んでしまったみたいだ。

倒れたまま動かない…。

まだ死んでいないはず。でも、このままじゃ…。

あ、あった！ ボタン、通報用のボタンだ！

これを押して早く警察と救急隊員に…！

……押せない。

指がボタンをすりぬける。

そうだ、そうだよ。あまりにもリアルで俺まで我を忘れてた。何で俺が慌てなくちゃいけないんだ。

落ち着け、これは夢だ。現実じゃない。

だから、覚める。意識よ、現実世界に戻ってくれ…覚醒しろ！

—————

「光くん、大丈夫ですかー？　うなされてましたよー？」

気が付くと、ミントが心配そうに俺の顔を覗き込んでいた。どうやら、目が覚めたみたいだ。

「いや、ちょっと…変な夢を見てな」

「汗かいてますよ？　着替えたらどうですか？」

体が熱い。なんでだ？　今は冬だぞ？　夢の中で、周りが火事だったから…か？

「ミント、今何時だ？」

「4時前です。光くんは一時間くらい寝てましたー」

一時間か…やけに長く感じたな。

変な夢だったな…。まるで、現実のようだった。

あと一時間後にスターサイドは爆発…いや、何を考えているんだ、俺は。そんなわけないだろう。

だが……なんだ、この胸騒ぎは。そわそわしやがる。体が、動け…と。

夢だよ、夢！　一流のレストランだぞ？　働いている奴らだつて一流に決まってる。そんな奴がミスなんてするもんか！

「ミント…」

「はいー？」

「出かけるぞ」

くそ、確認しないと気が済まない。後一時間か…。無事だったら無事で良いじゃないか。

俺は自転車を飛ばした。スターサイドはすぐ近所だ。急げば10分もあれば着く。

外は寒いというのに、俺は汗をかいている。体中が熱い。心臓もバクバクする。

そんな必死な俺を、ミントは不思議そうな顔で見ながら、全力で漕ぐ自転車の横を並走している。…と、いうか、飛んでいる。

急いだ甲斐もあって、10分もかからずに着いた。

俺は店内を走る。客や店員は、またしても俺を冷たい目で見る。

何も知らないんだから、当然だ。俺だって、こんな高級な店の中を汗をかきちらしながら疾走する奴を見たら変な奴だと思う。

エレベーターを使い、三階に移動する。やはり、レストランだ。俺の記憶に間違いはない。

厨房に駆け付けた。

「調理を辞めて下さい！」

そう一言。だが、そこで俺は過ちに気付いた。

「誰なんだい、君は？」

料理長らしき人物が、俺に言う。厨房の中は依然と静まり返る。

「え…あ、すみません。でも、5時になったら、ここが爆発の原因に…」

「なに訳の分からない事を言っているんだ君は」

「本当です！ 夢で見たんです！」

「夢…？」

そうだよ…信じてもらえる訳がないじゃないか。

「あの…その…」

「他のお客様に迷惑だ。これ以上騒ぐなら、警察に連絡するぞ？」

そして、何も言い返せないまま、俺は追い出されてしまった。

「どうしたんですかー？」

ミントが気にかけて話し掛けてくれた。

「さっき夢でな、一時間後……いや、もう30分後にここが火事になるのを見たんだ。火災の原因となるのがあのレストランだったから止めようとしたんだが……」

「夢……ですか？」

「信じられる訳ないよな。帰ろうか」

諦めて帰ろうと自転車に跨がった時、ミントが気になる事を言い出した。

「私は信じますよー」

そして、微笑んだ。

「今光一くんの脳…特に右脳。それが発達した状態になっていますー。それは寝ている時も同じですー」

「ど、どどういう意味だ？」

「簡単に言えば、正夢になるというより、予知夢に近いですー」

予知夢…？      あの夢が…？

だとしたら、あと30分後に本当に爆発して火事になるのか？

じゃあなおさら助けなきゃ！！

誰が何と言おうと、死ぬ人を救いたい。

皆はまだ生きられるんだ。

俺とは違う。

皆はまだ……

その時、爆発音が鳴り響く。夢と同じ、鼓膜が破れそうな程の。

キーンと耳鳴りがする。

慌ただしくなる周り。

一階に居たのであろう人達は、次々と避難してくる。

我先に走り、押し、転び…その姿は容姿は気品に包まれていようが何とも哀れである。

流れに逆らい、俺はデパートの中に入っていった…。

スターサイドの造りは一階から二階、そして二階から三階へ行く為に使うのは主に階段とエスカレーター。

よって、一階から三階までの客は停止したエスカレーターを階段代わりにして下りてくる。

問題は夢で見た四階である。

三階から四階へ伝うエスカレーターがないのだ。

エレベーターか、もしくは非常階段を使わなければならない。

もちろんエレベーターは止まっている。

隅に隠れた非常階段を使い、俺は四階に駆け上がった。

着くと、夢で見た光景の通りだ。

非常階段の存在を忘れた婦人達がエレベーターのボタンを必死で連打している。

「みなさん！ エレベーターは動きません！ こっちの階段から避難して下さい！」

俺の声を聞いた婦人はまだパニックながらも、我先に階段へと走った。

さて、次は…カウンターに倒れている店員の救助に…



——ドーン

な、何だ！？　また爆発？  
こんなの夢にはなかったぞ！？

まずい、天井が崩れ始めてきた！

次々と岩石の雨が降り注ぐ。

何とか店員を……………くそ！！

——————

目を開けてみる。どうやら気を失っていたようだ。

真っ暗だ…何も見えない。

体は…痛くない。まあ、痛みを感じないだけだが…。

でも、動かない。手も、足も。

指先が軽く動くだけ。

何かが俺の体の上に乗っているのか…。

下敷きになっちまったか…。

「ウウ……ウ」

…生きてる！

「大丈夫ですか？」

二度目の爆発音の後、天井が崩れる前に俺は店員の所まで走った。

間一髪、俺が店員の体に覆いかぶさるように寝て、下敷きを防いだのだ。

…危なかった。痛みを感じない俺じゃなかったら確実に即死だっただろう。

今頃、外はどうなったかな？

このデパートはどこまで崩れたんだ？

いっそ、全部崩れていてほしい。中途半端に崩れていては、また崩れる可能性もあるからだ。

四階にいた婦人達は助かっただろうか？

逃げ遅れた人は、この店員だけだろうか？

いずれにせよ、俺はやるだけの事はやったはずだ。

後は、救助を待つて、この店員を救うだけ…。

「……重い…痛…いい」

意識を覚醒させた店員からうめき声が聞こえた。かなり苦しんでいるようだ。

「大丈夫ですか？　どこが痛むんです？」

「頭…と、あ…し。おも……………い」

そうだ、確か頭から血を流しているんだ。それに足も痛い？

「おも…い」

重い……………？

しまった！　救助を待つなんて呑気な事を言ってられない！

俺の上に落下した天井。さらに俺の全体重が店員に負担をかけている。

俺は痛みこそ感じないものの、重みは感じる。

こいつを退けないと、結局の所、店員は助からない。

「……………ぐっ、ぐおおおおおー！！」

……駄目だ。どんなに頑張っても上の重りはどかない。

どうする…どうする……。

どうすれば……

「光くん！　　12時ジャストです！　　カードを！」

「ミント！　　いるのか！」

「はい。私達死神は物理法則を無視した能力を持っていますから。瓦礫も擦り抜けられます。そのかわり、今の私では光くんに触れたり、物に触る事もできないんです」

「そうか、状況を教えてくれ！」

「光くんのおかげで幸い逃げ遅れた人はいませんでした！。デパートは一階まで崩れ落ちてます。瓦礫に埋もれたど真ん中に光くんはいます。救助もしばらくかかるでしょう」

良かった…じゃあ、後はこの店員を助ければ良いんだな。

「現在深夜12時を回りました！　　カードを引けます！」

「ミント、俺の指先にカードを！」

「はいですー」

俺の体内に潜在している力よ！

ミントの能力で存分に覚醒するがいい…！

「頼む！ この状況を逆転できる能力…来やがれー！」

六日目〱健康運上昇中！(前書き)

次回が最終話となります。エピソードも同時に載せる予定です。  
もうしばらくお付き合い下さい！

六日目、健康運上昇中！

頼む！ この状況を逆転できる能力…来やがれー！

「六日目…健康運上昇ですー！」

健康運！？ なんだ、それは？

「光一くんに隠れた潜在身体能力が上昇しますー！」

何だ、この感覚は…。

体中に力が漲るような…そんな感じ。グツと力を入れると、腕の血管がビクビクと脈打つのが分かる。

って事は…

「うおおおお！」

動く！ 上に乗った重りが動くぞー！

もう少し…もう少しだああ！

「だあああああああ！」

「力持ちですー！」

ど…どうだ。見たか、この野郎…。

へへ、ざまあみろ。退かしてやったぜ…救ってやったぜ！

「店員さん、もう大丈夫ですよ！」

「はあはあ…はい」

くそ、暗くて何も見えん。

頭と足の血を止めたいが、何も見えないんじゃ話にならん。

馬鹿でかい瓦礫から下敷きを回避できたものの、まだ周りは瓦礫に囲まれているし、小さい瓦礫が崩れてくる。

上手い具合に上の方で引つ掛かってくれて、俺達は横に寝られるだけのスペースは確保した。

ただ、それだけ。

そこ以外は身動きできない。

やはり、このまま救助を待つしかない。

「大丈夫です。きっと助かりますからね」

「あ…。ありがとうございます」

「辛いなら喋らないでも結構ですよ？」



「いえ…大丈夫です。暗くて…恐くて…お話…しましょう？」

不安なのだろう。俺だってこんな状況だったら不安で仕方ないはずだ。

ただ、今の俺はズルいのだ。こうなる事を事前に知っていたし、何より、死なない。これが大きい。

死なないというハンディキャップ。これによって何でもできる。

もし生身の俺だったら。

死ぬかもしれない俺だったら、そもそもこんな所にいない。

関わらないように、いち早くその場から遠退いただろう。

爆発が起きたのが5時くらい。そこから気を失って、日付けが変わって、ミントの能力を使えた。

それからさらに一時間は経ったはずだ。

深夜になっても救助は続行してくれているのか？

もう既に、閉じ込められてから約八時間が経過しようとしている。

救助、遅くないか？

なぜ、周りから音が聞こえないんだ？

この店員は一刻を争う程の怪我かもしれないんだぞ？

大丈夫なのか、俺達？

「…私達、助かります…よね？」

店員の声に、体がビクツと反応した。おそらく、今不安だったからなのだろう。

「はい、助かりますよ」

「お名前を…教えてくださいませんか？」

「光一って言います。あなたは？」

「美里<sup>みさと</sup>です」

「いい名前ですね」

「光一さんこそ。他人の私なんかの為に…体を張ってくれて…」

「いえいえ、そんな事ないですよ。それに、俺は後二日で…」

おっと、これは言わない方がいいよな。

「え？ 後二日で…何なんです？」

「いや……その…この土地を引っ越しますし」

「……そうなんですか」

上手くごまかせた。最近はアドリブが効くようになったもんだな。

この後も、美里さんと色々な事を話した。

普段はどういう生活をしているか。好きな食べ物は何か。好きな異性のタイプ。とにかくつまらない事でも、何か話していないと不安だろうと思い、話題を振った。

美里さんとは話が合わない点もたくさんあった。

俺の事を話す度に驚かれる。

高校生なのに、欲がない。

それは自身にも充分に分かっている事である。ミントにしろ、葉月にしろ、俺の部屋を見た最初の発言がそれだった。

そういえば…葉月は今なにやってるんだろっনাあ…。

「光一さん！ 朝…朝ですよ！」

「え！？」

美里さんとの会話は、不安だけでなく、時間までも取り除いてくれたみたいだ。

話している内に、気付けば朝日が昇る時間になっているではないか。

瓦礫の隙間から差し込む光が、とても眩しく感じる。

「早く！　早く着てちょうだいよ！」

「子供が…高校生くらいの子が残ってるかもしれないの！」

「まだ美里の行方が分からないの！　絶対この中にいるんだから！」

「分かりましたよ。今から作業を再開しますので、離れて下さい」

今の声…聞こえたぞ。微かだが…確かに聞こえた。

きつと、四階のフロアにいた婦人達だ。こんな朝っぱら来てくれたのか。

「美里さん、聞こえましたか？」

「…もちろん。さっき私の事を心配してくれてた人の声は……早紀…ありがと…」

美里さんは既に泣いてしまっている。安心したのか、嬉しかったのか…どっちでも良いか。

後は俺達の場所をアピールできれば良いんだが…

どうやらクレーン機が動き出したようで、その音に俺の声は掻き消されるだろう。

美里さんの怪我が心配だから、大声を出させたくはない。

やはり、じっとしているしかないのか…。

救助が始まり、約二時間。

無事に俺達は発見された。

美里さんは急いで救急車に運ばれて行った。

俺はたいした怪我はしていないが、念のためと言う事で救急車に乗せられ病院へ運ばれた。

美里さんは急患なので、違う病院に運ばれるらしく、別々の救急車に乗った。

俺が担架で運ばれる時、朝から来てくれていたのであろう婦人達が集まってきた。

「ありがとね、君のおかげで、ほら。この通り怪我一つないわ」

「本当は昨日の夜のうちに助けてあげたかったんだけどね、救助隊の人達が夜が明けてからって…」

「大丈夫ですよ。僕もたいした怪我はないですし」

「あらそう。よかったわあー」

と、言うよりも…傷口が既に治りかけていた。

美里さんを庇う時に擦りむいたはずなのに…膝には出血の跡まであ

るのに…。

血は乾き、傷口が塞がれていた。これもミントの能力…か。

病院に運ばれた俺は検査を受けたが、当然の事ながら異常なし。医者も不思議がっていた。

ようやく開放された俺を待っていたのは、報道陣だった。病院の前だと言うのに輪を作り、俺を囲う。

やべ… 有名人の気分なんですけど。

「怪我はないですか？」

「どんな気分でした？」

「レストランのオーナーが高校生が予言したと言っていましたか？」

迫りくる質問の嵐。決して気分は良くないが、案外悪いものでもない。

適当に質問に答え、もうそろそろ満足しただろうと思われる所で抜け出した。

時間は午後になったばかりか…。

あー…今日はテスト二日目だったのになあ…。せっかく覚えたのに無駄になっちまったか。

全教科満点という快挙を逃してしまったな。まあ、仕方ない事だ。

それよりも美里さんが気になる。

そこで俺は報道陣から聞き出した美里さんの病院へ向かう事にした。なんとも偶然で、美里が運ばれた病院は達也が入院している病院だった。

駅周辺に停まっていたタクシーを拾い病院に向かう。

受け付けの看護婦さんに美里さんの病室を聞いた。

ちなみに、達也は昨日無事退院できたらしい。よかったよかった。

エレベーターを使い三階まで上り、一番奥の部屋が美里さんの部屋らしい。

「久保 美里……ここか。失礼します」

中は少し狭いが個室だった。美里さんはベッドで眠っている。

頭に包帯、腕に点滴みたいなチューブを注している。

…その姿は痛々しかった。

どうやら一命を取り留めたようで安心した。起こす事などできないので、棚の上にあったメモ帳とペンを借り、『お大事に。く光一より』と書き置きをしておいた。

病院を出た俺は、大きく伸びをして、今後なにをするかを考えた。

昼寝をした後とは言え、一晩中寝ずに恐怖と戦ったはずなのに全くと言って良いほど眠くない。

疲れているはずなのに、逆に走り出したい気分だ。

ミントの能力も融通が効かないものである。自ら制御はできないものかね…。

まあ良い。夜にでもなれば能力の威力も弱まるだろう。

とりあえず、疲れるためにもここから走って自宅まで帰るとするかな。

俺は約二十キロの道のりを、勢い良く走り出した。



**最終日〱全体運上昇中！（前書き）**

いよいよ最終回となりますが、エピソードまでがこの物語りとなります。長くなってしまいましたが、あと少しお付き合いをお願いします！

最終日、全体運上昇中！

――朝、俺は無駄に早い時間に目を覚ました。

ホントに…いつもダルそうに起きる俺は、もういない。それは一週間前までの俺。

今は…違う。

「おはようございますー。もう朝食できてますよー」

今はミントがいるから。

――――

朝食を食べ終わり、珈琲を飲みながら新聞に目を通す。

おお、一面記事に俺載ってるんですけど。  
なにに、客入400人を救った高校生…照れるうー。

まああの事件はニュースでも騒いでいたからな。今日あたり学校行ったらマジで俺ってヒーローになるんじゃない？　うはー。

「光一くん、顔がニヤけてますよー？」

「おっと。すまないな、ミント。顔洗ってくるわ」

洗面所に行き、水で髪を濡らしてドライヤーで乾かす。寝癖がとれた髪にワックスをなじませ準備完了。

リビングに戻るとミントが申し訳ない顔をして座ってる。

「光一くん、あの…」

「あ、何かトイレ行きたくなっ たな」

そして便所へ。これは毎朝の日課である。

戻ると、ミントは更に申し訳なさそうに…尚且つ苛立っているような顔をしている。

「光一くん、そろそろ…」

「う、まだ少し残尿感があるなあ。もう一回トイレ…」

「光一くん…！」

.....。

ふう、何か情けねえな、俺。

何、ミントから逃げてたんだよ…。

「ゴメン、ミント。じゃあ…いつもの、頼むわ」

「はい、これが…最後のカードです」

この言葉を聞きたくないために、不覚にも俺はミントから逃げていた…。

自宅での能力上昇は、必ずと言っていいほど、カードを引かされるのは朝食の後だった。

意味ないのにな。カードを引こうが引かまいが…。

ホント、情けないよ…俺。

俺は恐かったのかもしれない。いや、むしろ怖い。めちゃめちゃ怖い。泣きたい程に、崩れそうな程に、誰かを頼りたい程に…怖い。

俺は躊躇う。カードを引くという行為を。

手を伸ばせばカードに触れられる距離だ。なのに、届かない。俺は手を伸ばそうとしない。震えている。昨日400人を救った『ヒーロー』は、震えている…。

死ぬから。

今日、俺は死ぬから。

それを事前に、知っているから。

最初は死ぬ事に恐怖なんか感じなかった。でも、ミントに出会い、不覚にも『生きる事は楽しい』と感じてしまった。

ミントはしっかり意思さえ持っていれば生まれ変われると言っていた。

それでも怖い。

怖い… 怖い… 怖い…。

俺は死ぬのが――

「泣かないで下さい。光一くん」

俺の身体を包みこむ柔らかい感触。

「大丈夫です。生まれ変わりますから。だから…大丈夫です」

そう言っ、俺を抱きしめる力を強めたミント。

ミントの顔は俺の胸までしかないほど、低い身長なのに…今は頼もしく感じた。

知らず知らずの内に流れた涙は、より一層威力を増し、頬を伝いミントの髪を濡らす。

俺もミントを抱きしめる。震える。ミントの肩を小刻みに揺らすほど震えている。

「ありがとう…ミント」

「いえ、平気ですよ？　もう少しこのままでいましょうか？」

「いや、もう大丈夫だ」

ミントから腕が離れる。まだ、震えは止まらないが、いくらか楽に

はなった。

「ならいいんですがー『ヒーロー』の涙を止める役も、案外悪くないもんですね」

その笑顔が決め手となり、俺の震えは完全に止まった。

意思をしっかりと持った瞳は、標準をカードに定め、視点をそらさない。

ゆっくりと手を伸ばす。

確かな感触。

ミントの手から、最後のカードが離れた。

そして、引いたカードに書かれていたものは――

「……全体運」

「最終日は全体運アップですー」

この台詞を聞くのも、今日で最後だ…。

時間は止まってはくれない。俺の死へのカウントダウンは刻一刻と、いつもと変わらぬスピードで時を刻んでいく。

「ミント、全体運とは、一口にどういった意味なんだ？」

「そのままの意味で捉らえてもらって構いません。何をしても上手くいく。まるで、世界が光一くんを中心に回るようなものです」

おお、なんか最終日だけあって、凄まじい能力だな。

俺を中心に…か。

悪くないな。

「何かやり残した事はありませんか？」

やり残した事…はは、そんなものないさ。

欲しいものもない。これは、生きたいと強く願った今でも変わらない事。

……いや、一つだけあるな。

欲しいものが。

それは――

突然、部屋中にチャイム音が鳴り響く。どうやら誰か来たみたいだ。



誰だろう？　思い当たる節では、葉月か達也と一緒に登校しよう  
と迎えに来てくれたのだろうか？

「はい」

俺は返事をし、玄関までの短い距離を小走りで移動する。

「はい。……………！！！」

ドアを開けて驚いた。

「父様、母様……」

なんと父と母が、玄関に立っていたのだ。

ありえない話だが、母の顔を見るのは一年ぶりだ。父に至っては、  
かれこれ約三年間も顔を合わせていない。

それも、顔を合わせただけ。会話は皆無である。

そして、一家全員が揃うのは、実に五年ぶりである。

久しぶりの再会でも、父と母を忘れる程俺は馬鹿じゃない。

幼き頃の名残が、両親の存在を鮮明に覚えている。

全く変わらないわけではない。母は少し太った。父は髪が少しだけ薄くなった。

それ以外にも、わずかな変化を見逃さない。

俺の記憶の中での両親とは少し違うが、それでも実の父と母。間違う訳はない。

「光一、さつき海外から帰ってきたばかりなんだが、偶然にも母さんと玄関で会ってな」

「そうなんですか。お仕事、お疲れ様です」

「光一さん、朝食は済みましたか？　今からお父さんと食事するけど、一緒にどう？　久しぶりに母さんの手料理よ」

か、母さんと父さんが一緒に食事を！？　　どういった風の吹き回しだ？

…あ、そうか。ミントの能力…か。

「今日は偶然が重なる日だ。何せ私も母さんも仕事が休みだからな。たっ、確か父さんの休日って年に二、三回ぐらいしかないんじゃないかな。かつたっけ？

そうだよな、俺は今日で死ぬんだ。今更学校でテストを受けたって、何の意味もない。

だったら最期くらい、せめて家族と…。

俺にも居た、『家族』と…。

「はい、いただきます」

ミントが作った朝食を食べたばかりだったが、何とかなるだろう。

――――

そして、奇跡的に揃った一家は、母さんの部屋へ入る。

もちろん、部屋の造りは俺の部屋と全く同じである。

母さんの部屋に上がるのも初めてだ。かなり綺麗にされている。…と、言うか生活感がない。

まあ、何日も家に帰らないのだから無理はないか。さっきまで海外に行ってたらしいし…。

父さんの部屋はもっと生活感がない気がするけど…。

部屋は洋風の造りになっているため、一先ず俺と父さんは椅子に腰掛けた。

母さんは台所で朝食の準備に取り掛かっている。

「光一、学校どうだ？」

「はい、今回のテストは満点の自信があります。まだ返ってきてないですけどね」

「そうかそうか。それは素晴らしい事だ」

なぜ、こんなにも平凡な会話に…そして相手が親なのに、俺は緊張しているのだろうか？

堅苦しい言葉…でも、失礼のないように慎重に言葉を選んでいく。

なぜ…俺は親に敬語なのだろう…。

なぜ…父さんと最後に話した日を思い出せないのだろうか…。

なぜ…なぜ…

……………なんで……………

「お待たせ」

下を向いていた俺に、白い湯気がかかる。

味噌汁だ。ほうれん草と豆腐が入ってる。

次々と母さんは料理を運んできた。

白米、味噌汁、目玉焼き、サラダ……何ともまあ普通の朝食だった。

「ふふ。外国にいるとね、お味噌汁が飲みたくなるの」

「そうだな。これが、我が日本国の味だもんな」

「光一さん、どうぞ？」

「い、いただきます！」

俺は胸の前両手で手を合わせ、箸を手にとり味噌汁に手を伸ばす。

……あたたかい。うまい。

ミントには悪いが、この味噌汁は格別だ。

何せ、特別な調味料が入っているのだから…。

それは、母さんの心。

やばい、涙が出そうだ。

俺は夢中で朝食にがつついた。とは言っても、品の無い食べ方はマナー違反なのでしていないが…。

朝食を済ませると、沈黙が訪れた。

気まずい空気が流れる。何か話そうとしても、言葉にならない。

「……光一」

向かいの席に座っている父さんが、低いトーンで話し掛けてきた。

「はい、何でしょう?。」

父さんは真っ直ぐこっちを見ているので、俺も父さんの目を見て、次の言葉を待つ。

「本当に、すまない」

俺は驚いた。開いた口が塞がらないとは、まさにこの事を言うのだろうか。

なんと、床に手をついて頭を下げてきたのである。

土下座…? 父さんが…?

この…俺に?

「父様…! あの…」

「光一さん、私からも言わせてもらっわ」

続いて、母さんまでもが父さんの横で土下座をする。

「申し訳ありません」

「父様、母様！ いけませんよ、手が汚れます」

「許してくれ…光一」

そして、俺は見た。

うつむいた父さんから流れる涙を…。

――――

小さい頃の父さんは、本当に俺の中でヒーローだった。

だって、何でもできる人だから。

天性の才能なのだろうか、父さんは『万能人』だ。

医者、料理人、弁護士、ありとあらゆる資格を手に入れた父さん。  
それも、全てが一流。

その結果、今となつては日本に居なくてはならない存在。

8ヶ国の言葉を会得し、海外へ出張なんてのは当たり前。

そんな父さんと結婚できた母さんも凄い。

父さん程ではないものの、女性という性別を活かした職に就く、これまた万能人。

華々しい才能を持つ母さんは、お花、ファッションデザイナーあたりの資格を持っている。

もちろんセンスが良かったために、その作品は日本だけに留まらなかった。

そんな万能人同士から生まれた俺なのだ。さぞ周りのお偉方は期待するだろう。

————でも

俺には何の才能もなかった。

ただの凡人。どこにでも居る一般の思考を持つ。

そして、俺は『閉じ込められた』

父さんと母さんの子供じゃないように。



そして、父さんと母さんの子供は、……………他に居た。

居たと言っ言い方は駄目だな。

正確に言えば『作られた』。

幼い頃から、周りよりもずば抜けた才能を持つ子供を、養子として貰った。

まあ、俺からすれば義理の兄となるわけだな。

俺達一家が、同じ部屋に住んでいない理由も、我が家が豪邸を建てる事もせずに高級マンションとしている理由がそれである。

周りには赤の他人として見られる為に……………。

もちろん、父さん達も本意でない事くらい分かっている。上の者から圧力をかけられている事も…。

義兄は、俺の変わりとして、現在は日本に大きく貢献している。

すでに婚約者もいて、ただ今同棲中らしい。

そんな万能人が今、凡人の俺に頭を下げている。

「父様、僕からも謝らせて下さい」

父さんは涙でくしゃくしゃになった顔を上げて、俺を見上げる。

俺は膝をついて、床に手をつけた。

そして、床の温度で額がひんやりする。

「何の才能も持たないで生まれてしまって、ごめんなさい」

この言葉が引き金となり、滝のような大量の涙が溢れ出た。

それは俺だけでなく、父さんも母さんも同じだった。

「光……一さん」

母さんは俺を抱きしめてくれた。

すく、良い匂いがする。

「今日は、本当に久しぶりに家族だけで過ごそう。光一、学校には連絡を入れておくから心配するな」

父さんは涙をふき、言った。

その言葉が、本当に嬉しかった。

――――

その後、周りから見たら、それはそれはつまらないだろうと思われるようなことをした。

主に、今までの俺の生活の事を話した。

もちろん、つまらなかったなどは禁句である。かなり美化された内容だったが、父さんは俺の一言一言に、うんうんと相槌してくれた。

葉月の事も話した。なぜか母さんが顔を紅くする。青春時代の自分の恋愛と重ねているのだろう。

止まらない。話題が止まらない。さっきまで何を話せば良いのか考えていた俺ではない。

ミントが来てからの一週間の出来事を、正確に伝える。それはまるで、俺自身が死ぬ前に思い出に浸るように…。

もちろん、ミントの存在は話していない。それを言ってしまうと、今日死ぬ事も言ってしまうそうさ。

現在時刻は昼の2時。タイムリミットは後10時間…。

それまでは、せめて…笑っている顔を見ていたいのだ…。そして、俺も笑っていたいのだ。

偽名である『片瀬 光一』ではなく

本名である『すなが須永 光一』として

笑っていたいのだ…。

タイムリミットは刻一刻と近付いてくる。ミントはそれを気にしてか、時計をチラチラと見ている。

「光一、ちょっと、散歩に行かないか？」

父さんが言った。

散歩…それは嬉しい。嬉しすぎる。

でも、良いのだろうか？

もし、父さんが俺といるところを他の誰かに見られたりでもしたら…。

「はい。僕は構いませんが、大丈夫なんでしょうか？」

「大丈夫って、何がだ？」

「その…誰かに見られたりしたら…」

「すまないな。子に気を遣わせてしまうなんて、私は父親失格だ」

「いえ、別にそんな…」

「お前が気にする事じゃないさ」

「なら、行きましょう」

俺は制服のままだったが、父さんもスーツのままなので、この格好のまま外に出た。

大して思い出のない道が、新鮮に思えてくる。お気に入りの散歩コースなど知らないのも、近所を適当に歩く事にした。

時刻はすでに夕方6時。辺りは暗くなりはじめ、空には一番星が出ている。

あと…6時間か。

「光一よ、そんなに周りを気にしなくとも良いぞ？」

「すみません。やはり気になるので…」

「光一、『親子』というものはな、会話に敬語は使わないんだぞ?」

「は…はい。いや…うん」

「ハハハ、そうだ」

会話に敬語…。

幼い頃は無理矢理にでも親に敬語を使わされていた記憶が蘇る。

父さんも思い出したのだろうか、少し表情が曇る。

不意に、周りの視線が父さんに集まっている事に気付いた。

テレビで見た事ある…などの小言が聞こえてくる。

やはり、俺と一緒にいるのはまずい。

「父様……父さん。やっぱり俺と一緒にじゃ」

「光一!?!」

「はい!?!」

怒鳴られたので、つい敬語になってしまった。

「お前の最期くらい、父親面させてくれよ」

「……………え？」

「横にいる娘は、死神さんだろ？ 随分と幼くて可愛い顔をしているが……死神がいるって事は、光一の死期が近い事を意味しているのだな？」

万能人は、死神までも見えてしまうのか…。

父さんは『そこか』と呟く。その視線の先には、ビンゴでミントがいる。

「名前は？」

ミントはかなり慌てているようだ。姿を消している（俺にだけは見えている）のに、人に見られたのは初めてなのだろう。

「ミ、ミント…です」

「…………ふむ。ミント。良い名前だ」

なんと、声まで聞こえている…！

「光一を連れていってしまうのかい？」

「はい、残念ですが、深夜12時を回った時点で」

「……………そうか。相手が死神では、私の霊能力も赤子当然だろうな」

ミントは一瞬、身構える。父さんに除霊でもされと思ったのだらう。

（嘘…でしょ？　この人、私より強い。本当に人間なの？）

「ミントさん。失礼させてもらっよ」

「……………ひっ!？」

父さんは突然、ミントの頭を手で撫でだした。

ミントはされるがままにおとなしくしているが、目を閉じて震えている。

「……………成る程な」



父さんはミントから手を離した。そして、悲しい目をしている。

「ミントさんの記憶を読ませてもらったよ。光一、本当に私は父親失格だ」

万能人恐るべし…！

父さんがそんな事をできるなんて思いもしなかっただけに驚きである。

ミントはしばらくボートとしていたが、すぐに意識を取り戻した。

「もはや、私にはどうする事もできないな。力ない父を許してくれ」

どこの誰が、この完璧な万能人を、力がないと言えるだろう。

「俺は最期に父さんとうとうして話せてる。それだけで充分満足だよ」

「すまないな。だが正直、ここまで読めたのは初めてだよ。きっと、我が子の為に必死だったんだろうな、私は」

……父さん。ありがとう。

「さあ、帰ろう。きっと母さん、今頃目を腫らしているだろうから」

「…え？」

「母さんは私以上に霊感が強い。それに、占いで不吉を予知していたらしい。実は今日、仕事が休みなのは偶然じゃなくて、母さんに緊急帰宅を知らされたからなんだ。」

母さんは光一の顔を見ていると泣きそうだと思って、こうして散歩に誘ったんだ」

そうか、母さんも万能人なんだ。占い……か。今は、その力を信じれるよ。

そして、俺達は家に帰る事にした。

部屋に入ると、父さんの予想は当たっていた。母さんの目は赤くて少し腫れている。

……泣いてくれていたんだ。

「……ただいま」

「……おかえりなさい」

次の言葉を探す。でも、見つからない。母さんの作り笑顔を、ジッと見つめる事しかできなかった。

俺に隠れていたミントが、ひょっこりと顔だけを出す。母さんに怯えているようだ。

母さんはもう、ごまかしはしなかった。

ミントを見つけると、冷たい目で睨み付ける。

「ゆっくりしていきなさい」

それだけ言っと、台所の方へ行ってしまった。

「ミント、ゴメンな。悪いのは俺なのに…お前に辛い思いをさせちまうて…」

「き、気にしないで下さいー。し、死神に感情なんてありませんからー」

ミントも、嘘が下手な奴だ…。

最後の晚餐。

終始無言で夕飯を済ませ、時刻は既に夜の10時。

あと…2時間…。

俺は焦っている。死ぬのが恐くないなど、もはや言えない。

じっと座っていることができない。常にそわそわしている。動いていないといけない気がして…。何かをしていないと不安で…。

落ち着け…無理だよ…いや、落ち着くんだ…だから、無理だって…。独り言で喧嘩しはじめる。

そうだ、風呂にでも入って、気持ちを落ち着けよう。

風呂は母さんが沸かしてくれていたみたいで、良い具合に湯気が立っている。

シャワーを頭からかぶる。

しばらく、俺はその体制のまま、動かなかった。

どうしよう…死んじゃうよ…。

一人でいるのが、急に恐くなった。頭と体を洗い、湯舟にさっと浸かり、風呂を出た。

居間に戻ると父さんと母さんが、深刻な顔付きで待っていた。

「光一、そこに座りなさい」

二人の前にある椅子に座る。  
残り…あと1時間を切った。

「何から言おう…かな」

父さんも言葉探しに戸惑っているみたいだ。俺からは何も言う事ができない。

再び訪れた沈黙を破ったのは、母さんだった。

「私たちは、光一さんに何一つとして親らしい事をしてあげられなかったね」

母さんの頬を伝う一筋の涙に、俺の涙腺も緩む。

「そんなことないですよ。だって、今日は……本当に嬉しかったです」

「……光一さん」

涙でお別れは好きじゃない。俺は笑った。

笑ってるのに、なぜか涙が出てきた。

本当にもう、これで終わりなんだ。言いたい事は山ほどある。否、あった。

会えたから、もうどうでもいい。

俺は二人の息子として思われていた。それだけで充分だ。

だからこそ、二人の前でぱったり逝く訳にもいない…。

「それじゃあ、僕は部屋に戻りますね」

最後は、とびっきりの笑顔を見せた。

「ああ、おやすみ」

「おやすみなさい、光一さん」

つられて、二人も笑った。

俺が部屋を出て、ドアを閉めた瞬間に、中から母さんと父さんの叫び声とも言える程の泣き声が聞こえた。

俺は夜空を見て思う。

また、こんな親の下に生まれたい。

この思いは、届くだろうか――

自室に戻り、ベッドに横になる。残り……あと3分。

ついに、この時がきた。

「ミント、ありがとう。お前のおかげで、生きるって楽しいって思えたよ。黄泉の国でも会えるかな？」

「ふふ、良かったです。黄泉の国じゃ、たぶん会えませぬね。だって光くんは――すぐに生まれ変わりますから」

「そうだな」

そして、目を閉じた。

光が見える。

光の中には――

……達也。

俺の人生で初めてとっていいほどの『友達』と呼べる奴。

笑ってやがる…。

達也、お前の中に送り込まれた、俺の血。  
お前の中で、俺は生き続けるよ。

一つの光が消えた。  
すると、また光が現れる。

…葉月。

人生初の『恋人』

気付かなかったが、いつも俺に気をかけてくれた。

…笑った顔。

その笑顔が好きだ。

葉月の中に送り込まれた、一億個の俺の分身は、消されてしまった  
だろうか？

光が消える。  
そしてまた、別の光。

…美里さん。

本当は、そんなに綺麗な顔立ちだったんですね…。  
怪我、治って良かったです。

これが…走馬灯というやつか。

ありがとう、ありがとう。

ありがとう、皆。

死ぬ前に皆の顔が見れるなんて、俺は幸せだ。

そして、こんな思い出をくれたー

「ミント…ありがとう」

「どういたしまして。ー時間です…ね」

深夜12時ジャスト。

ーさようなら。

そして



――ありがとう。

エピソードぐっ死んじゃうんだって

12時ジャスト。

俺はこれから死ぬ。

さようなら。そして、ありがとう。

「待ちなさい！」

ミントがかざした手を止める。

誰…だ？ 俺は訳も分からず時計を見た。

一秒、二秒…と、タイムリミットが過ぎていく。

な、なんだ？ なんで俺は生きているんだ。

「ー神様！？ なぜ、ここに？」

神様…と呼ばれたジイさんは、白く長いヒゲを生やし、髪の毛は無い。純白の布を身に纏い、眩しい程の光を放っている。

同じ空間にいただけで、この緊張感。ただ者ではないことが伺える。

「その青年は、生きるべきじゃ」

……………え？

何だと？

俺は…生きていて良いのか？

死ななくて良いのか！？

「神様！？ 何を！？」

ミントが慌てて聞き直す。

「なりません！ いくら神様の命令だろうと、光一くんは、今から私がー」

「私の命令が聞けぬか！」

神様はミントに手を向ける。手から肉眼では確認できない『何か』が放たれ、それを浴びたミントは、壁に飛ばされる。

「青年よ、生きるがいい」

そして、次は手を俺に向ける。

そこから放たれたのは、衝撃波などではなく、優しく…温かい光だった。

「……させない…！」

その光を、立ち上がったミントが遮る。

「この光、生きている者が浴びると、ただでは済まないぞ？」

「構わない…光くんは…死ぬんです！」

俺は寒気を感じた。

今まで感謝していたミントが…良い奴だと思っていたミントが、必死に俺を殺そうとしている。

なんでだよ、ミント…。

俺、生きられるんだろ？

だったら、良いじゃんよ…。

生きたいよ。

死にたくないよ。

「り…理由は？ 光一が生きられる理由…なぜ、運命が変わったのですか！」

ミントは、なおも光を浴びている。その表情はかなり辛そうだ。

「運命を変えたのは、青年、お主じゃ」

「……俺？」

「お主は、この一週間の内、死ぬはずだった人間を何千人と救った。スターサイドの客、それに最大の原因は――」

「競輪で当たった金を………寄付した……」

「そうじゃ。それにより、死ぬはずの魂は黄泉に來なくなった。よって、青年は生かす事に決めた」

…やった。

やった、やった！

やったあ！

俺は叫びたい程嬉しくなった。

生きていて良い…。

神様直々に、そう言っていたのだ！

やったあ…やったあ！！

「駄目です！！」

それでも、ミントは認めない。

はあ？ 何こいつ？

そんなに俺を殺したいわけ？

「なりません…光一くんは死ぬんです…！ 神様がそう言うなら…私が今、光一くんを殺します！！」

ミントは俺の方に振り返る。

光を浴びたミントは苦痛の表情を浮かべ、俺に近づいてくる。

「やだ…やだ…死にたくない…やだ…神様…助けて…」

俺は逃げる。ミントは敵だ。やっぱり死神なんか信用しちゃいけないかったんだ。

神様は人間の味方だ。

俺は神様の方へ逃げた…。

「きゃあ…！ ぐっ…ぐううう…。痛い…体が溶ける…でも、

光一くん………を殺………さな………きゃ………」

いやだ……いやだ……いやだ……

俺は死にたくない。

やだ、やだ……やだやだやだやだ！

「神様！ あの死神を殺してくれえ！」

「残念じゃが、死神は死なないんだ。よって、黄泉への強制帰還じや」

そういつて、神様は光を強めた。

「きゃあああああ！」

ミント……いや、『裏切り者』はその光を浴びて、蒸発した。

「……た、助かった。神様……俺は本当に……」

「私が認めた事だ。これからの人生に励むがよい」

そう言つて、神様は消えた。

暗い一室に、俺一人だけが残される。まるで、長い夢を見ていたかのように。

でも、今、全てが終わった……。

目が覚める。目に映るのは、いつもの俺の部屋の天井だった。

生きている…確かな実感。

そつだよ、俺、生きていて良いんだ！

父さん、母さん！　俺、生きているよ！

喜びを抑えられない俺は部屋を飛び出した。向かった先は、もちろん隣の部屋。

父さんと母さんに、伝えたかった。

呼び鈴を鳴らそうと手を伸ばすと、それより先にドアが開いた。

慌ただしい様子の母さんが出てくる。

「母様、俺…」

「どきなさい！　私は急いでいるの！　ああ、もう…なんで日本に帰ってきちゃったのかしら！」

……え？　　かあ…さん？

その隣のドアが、勢い良く開く。父さんだ。同じく慌ただしい表情…。



「父さん、俺、生きて…」

「私に話しかけるな！ 周りに見られたらどうするつもりだ！？  
それに、敬語を使えと言っただろう！」

…父さ…

な、何言って……。

いいや、落ち着くんだ、俺。

そつだよ、俺と父さんが一緒にいるのが見られたら、やばいに決ま  
ってるじゃないか。

俺は俺なりの人生を…そう、学校だ！ 友達が待ってる。葉月が、  
達也が、皆が待ってるんだ！

そつと決まるが早いが、俺は学校に走って行つた。

「おはよう、皆！」

教室のドアを開け、クラス全員の奴らに挨拶をする。

「……………」

友達からの返答はない。

ふと、達也の姿が目に入った。そつだ、達也は退院できたんだ。学  
校に来れる程回復したのか。

「達也、おはー」

「何しにきたんだよ」

「……え？」

「お前が居なければ俺は刺されずにすんだんだ」

「そうだよ！ 達也が可哀相だ！」

「達也は偉いよな。まさか光一なんかの為に身体はってさ」

クラス全体から、俺に向けて罵声が飛び交う。

ま、待ってくれよ。なんだよ、これ…。

「おかげでテスト受けられなくてさ、お前のせいだよ」

達也が睨んでくる。

俺は何も言えなくなり、おとなしく席に座った。

隣の席には、葉月がいる。

「葉月、おはよう」

「……………」

「葉月？」

「ちょっとあんた！ 葉月に気安く声かけてんじゃないわよ！」

葉月の後ろに、友達らしき人物が四人、立っている。

「あんだ、葉月の事レイプしたんだって？」

「はあ！？　ちよつ……ええ！？」

「ゴムも付けずにさ！　これで葉月が妊娠したら、どう責任とるつもり！？」

ちよつと…待て…！

何だよ…皆して…。

葉月…達也…説明してくれよ…。

何が…どうなってるんだよ…！

「片瀬光一くん、片瀬光一くん、至急職員室まで」

未だ頭の中が整理できない俺に、突然呼び出しの校内放送。

教室にいては、クラスメートの視線が痛いので、すぐに職員室に向かった。

中に入ると、これまた重苦しい空気だった。おそらく、さっきの放送は担任の声だった。ざっと見回して、担任を発見したので、そちらに向かう。

「先生、呼びましたか？」

「これを説明しなさい！」

……………？

先生はいきなり、新聞を叩きつけてきた。

記事の内容…それは、スターサイドの例の一件。

俺は褒められに来たのか？

いや、違う。どうも先生方は、俺を怒鳴り散らしたい様子だ。

「これが、何か？」

まだ事態を飲み込めない俺に、先生はムツとした表情を浮かべ、記事の一文を指差してきた。

そこには、こう書かれていた。

――先日、スターサイドの突然の爆発の一件だが、爆発の原因はレストランからではなく、故意的犯行者がいることが判明した。

犯人はいまだ捕まらないが、事件が起こる約30分前に、ある高校生が忠告をしている事から、グループの関係者ではないかとの疑い。警察はなおも捜査を続行している――

「……………はい？」

「なぜ、お前は事件が起こるのを知っていたんだ？ 犯人を知っているのか？」

「ちよっ…待って下さいよ！」

夢で見たから…なんて、言えるはずがない。

どうやら、俺は疑われているようだ。

「我が校のイメージががた落ちだ！」

「待って下さい。もし俺が犯人のグループだとするなら、わざわざ危険を犯してまで皆を助けに行くわけ…」

「それは署の方で聞かせてもらうよ。…詳しくな」

肩に手を置かれ、振り返ってみると警察が二人。  
俺は連行されてしまった…。

事情調査を行われ、なんとか俺の白が認められた。  
だが、急にどうしたっていうんだ？

世界が、歪み始めている…。

警察署から開放され、俺は真っ直ぐ自宅へ帰る事にした。

おかしい…。

葉月も、達也も…。

明らかに今日、何かが変わった。

もはやこうなれば、原因はミント以外考えられない。

くそ…！      アイツ、俺を不幸のどん底に道連れしやがったな！

許さねえ…ちくしょう…ちくしょう！

部屋に入り、行き場のない怒りを拳に込め、壁に叩きつけた。

何の解決にもなってねえ…。手が痛んだだけだ…。

「光一様…でいらつしゃいますか？」

ふと、部屋の中から俺を呼ぶ声が聞こえた。

「だっ、誰だあんた！ 不法侵入ー！」

「ミントから手紙を預かってきました。どうぞ」

ミントの存在を知っている…？      こいつ、死神業者か？

「ミントは…？      あの野郎どこ行った！」

「ミントは神様に逆らった罪により、一生奴隷まで降格になりました。それより、手紙です。本来、これは禁じられていますが、ミントがどうしても言うので、特別に許可がおりたものです」

俺は手紙を受け取り、封を解いた。

「光一くん。私はあなたに重要な事を言っていますでした。しかし、これを先に言っただけはいけないうので、今更ながら言わせて下さい。」

私の能力は、あなたの運を一時的に急上昇させますが、実はこれにはある仕組みがあります。

それは、光一くんの未来の分の運を前借りという形で縮小させたものなのです。

それが、この一週間で起こった全て。つまり、光一くんはこれから何をやっても、どんなジャンルでも、運を使い果たしてしまっているのだ、全て失敗に終わります。

それだけではありません。今まで仲の良かった人、この場合は葉月さんと達也さんにあたりますが、この一週間とまるで逆の態度をとられてしまいます。

私が必死に光一くんを殺そうとした理由がそれです。

あなたには、生まれ変わって、新しい人生を歩んで欲しかった。もう二度と会えないでしょう。

それではミントより

「……な!？」

「ご理解いただけましたか？　では、私はこれで」

「待つてくれ!」

放心状態の俺をよそに、そいつは消えてしまった。

な、何をやってしまったんだ…俺は……。

――――

俺は今、住んでいるこの町の中でも、間違いなく五本指に入る高さのビルの屋上で風を浴びている。

こっちの心境なんかお構いなしに吹く心地良い風が、無造作にセツトされた長い黒髪を靡かせた。

そこで俺は目を閉じてみる。

今までの18年間の出来事が、嘘のようにポツカリと忘れ去ってしまっている。



――否、ここ一週間の出来事だけが、頭の中から離れない。

俺は向かう。フェンスの向こう側へ。

もちろんその先の地面など、遥か下の方である。

間違いなく即死できる高さだ。

下を見ると、人間が豆粒のように小さく見えた。  
不思議と恐怖は感じられなかった。

「さて…」

俺は一度大きく息を吸い、そして吐いた。

準備完了。いつでも逝ける。

そう、一週間前はここでミントに出会った。

でも、ミントは今……………。

ふいに背後から、声が聞こえた気がした。

「――死んじゃえよ」

## エピソードぐっ死んじやうんだって（後書き）

これで完結です。バットエンドになりましたが、いかがでしたでしょうか？      もしやエピソードは蛇足？      今後の参考にさせていただきますので、よろしければ感想お願いします。      最後までお付き合いしてくれて、ありがとうございました！      最

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1076d/>

---

死んじゃうんだって

2010年10月17日19時29分発行